



てきすとぽい杯

VOL

12

<http://text-poi.net/>



# 目次

---

てきすとぼい杯について

てきすとぼい杯について

第12回 募集要項

第12回 審査結果

入賞作品紹介

## 《大賞》

● 『脱出ポッドの三人』 るぞ 獲得☆ 4.222

《組優勝・入賞》 ※得票順／連結作品は並べて掲載

### 《入賞》

● 『S & M』 豆ヒヨコ 獲得☆ 4.200

### 《白組優勝》

● 『雪が降ると彼女のことを思い出す。』 司令@一字でも前へ 獲得☆ 4.000

### 《入賞》〈トップオブ連結作品賞〉

● 『ジュカ』 犬子蓮木 獲得☆ 3.889

### 《白組優勝》〈トップオブ連結作品賞〉

● 『メニカ』 犬子蓮木 獲得☆ 4.000

● 『炎』 Wheelie 獲得☆ 3.700

### 《入賞》

● 『雪』 Wheelie 獲得☆ 3.875

〈候補作品〉 ※得票順／連結作品は並べて掲載

● 『眠る衝動』 茶屋 獲得☆ 3.800

### 〈NGワードを言ってみろ賞〉

● 『魔界都市 最強民族に越中泥棒困惑す』 しゃん 獲得☆ 3.800

● 『幻雪』 茶屋 獲得☆ 3.778

● 『林檎の彼女 再び』 orksrzy 獲得☆ 3.750

〈男と女は解り合えない賞〉

- 『戻らない。』 秋吉君 獲得☆ 3.700

〈男と女は解り合えない賞〉

- 『豆腐を買いに。』 秋吉君 獲得☆ 3.727
- 『鐘の音の行方』 げん@姐さん 獲得☆ 3.700
- 『錆びない刀の秘血』 ちゃーち 獲得☆ 3.667

〈年末総出演賞〉

- 『宇宙・この劇的なもの』 小伏史央 (旧・丁史ウイナ) 獲得☆ 3.625
- 『アルファブロガー』 工藤伸一@ワサラー団 獲得☆ 3.600
- 『いつかみた光』 松浦徹郎 獲得☆ 3.500
- 『スノウ、スノウ、スノウ』 碓氷穰 (元うわああ ( r y ) 獲得☆ 3.444
- 『我は報す』 司令@一字でも前へ 獲得☆ 3.250
- 『雪印乳業の思い出』 ひやとい 獲得☆ 2.875

〈番外作品〉 ※投稿順／連結作品は並べて掲載

〈無修正ホワイト露出賞〉

- 『日焼け肌のメランコリー』 工藤伸一@ワサラー団 獲得☆ 3.900 (禁止ワード「白」使用)

〈赤は白の中に、白は赤の中に賞〉

- 『錆色の女』 永坂暖日 獲得☆ 3.778 (制限時間後に投稿)

〈赤は白の中に、白は赤の中に賞〉

- 『染めた男』 永坂暖日 獲得☆ 3.778 (制限時間後に投稿)
- 『痾』 太友 豪 獲得☆ 3.600 (制限時間後に投稿／お題「炎」不足)
- 『きみのために。あと余った分をわたしに少し分けて欲しい』 太友 豪 獲得☆ 3.000 (制限時間後に投稿／お題「雪」「光」不足)

〈関連作品〉

[関連作品のご紹介](#)

終わりに

[終わりに](#)

てきすとほい広告

奥付



「てきすとぼい」とは

URL : <http://text-poi.net/>

Twitter : <http://twitter.com/textpoi>

てきすとぼいは、2012年2月より製作中の、競作・共作サイトです。

無計画書房に集うWEB作家の有志で開発を進めております。

先日ようやく、投稿・投票・感想・チャットなど最低限の機能が稼働いたしまして、2013年1月より てきすとぼい主催の競作イベント「てきすとぼい杯」を開始いたしました。



「てきすとぼい杯」とは

神様は七日間で世界を創造した。

僕らは一時間で物語を想造する。

てきすとぼい杯は、制限時間1時間+推敲15分で、お題に沿った小説を競作するイベントです。

競作で作品が集まった後は、☆投票による審査、感想コメント、チャット会での意見交換や交流がセットになった、全体としては約一週間ほどのイベントになります。

### 第12回てきすとぼい杯〈紅白小説合戦〉

会場 : <http://text-poi.net/vote/41/> (紅組)

<http://text-poi.net/vote/42/> (白組)

紅組お題 : 三題 「炎」「血」「鏝」 禁止ワード「赤・紅」

白組お題 : 三題 「雪」「光」「乳」 禁止ワード「白・銀」

投稿期間 : 2013年12月14日 22:30 ~ 同日 23:45

審査期間 : 2013年12月15日 0:00 ~ 2013年12月23日 24:00

投稿期間中の Twitter まとめ : <http://togetter.com/li/603025>

第 12 回は、紅白 2 題・2 組に分かれての開催でしたが、複数投稿、特に紅白シリーズ作品を含む、紅組 12、白組 14、計 26 作品をお寄せいただきました。

## 第 12 回募集要項

---

### 【投稿について】

投稿期間：

12月14日（土）22:30 ～ 同日 23:45

紅白二題からお題を選び、制限時間1時間の間に、お題に沿った小説を書いて投稿してください。  
お題は、開始時間になりましたら、会場やてきすとぼい Twitter にて発表いたします。

紅組会場：<http://text-poi.net/vote/41/>

白組会場：<http://text-poi.net/vote/42/>

てきすとぼい Twitter：<http://twitter.com/textpoi>

お題発表より1時間で執筆、その後15分で推敲&投稿してください。

紅白両組への投稿や、同一組への複数作品投稿も可能です。

締切は同日 23:45 頃になる予定です（お題発表時刻により、若干前後します）。

### 【審査について】

審査期間：

12月15日（日）0時 ～ 12月23日（月）24時

審査方法は☆5段階評価で、てきすとぼいのアカウントをお持ちの方ならどなたでも投票できます。  
個々の作品に感想ページもございますので、作品を読んで感じたこと、☆投票では表現しきれない  
評価など、ありましたらなんでも、お気軽にご記入ください。

票の集計方法：

紅組・白組それぞれで、最も多くの☆票を獲得した作品を各組の「優勝」、以降2作品前後を「入賞」、  
優勝作品のうち☆票の高い方を、全体を通しての「大賞」といたします。

また、紅組作品・白組作品の☆票の平均を求め、高い☆票を獲得した組を今回の勝利組としたいと思います。

※時間外に投稿された作品、お題を満たしていない作品も、投票や感想は同じように行えます。

ただ、結果発表の際に、集計対象からは外させていただくことをご了承ください。

## 第 12 回審査結果

---

【紅組審査結果】 ※得票順、敬称略

1 位 ☆ 4.222

『脱出ポッドの三人』 るぞ

<http://text-poi.net/vote/41/4/>

投稿時刻: 2013.12.14 23:40 最終更新: 2013.12.14 23:46

総文字数 : 2299 字

2 位 ☆ 4.200

『S & M』 豆ヒヨコ

<http://text-poi.net/vote/41/10/>

投稿時刻: 2013.12.14 23:46

総文字数 : 2105 字

3 位 ☆ 3.889

『ジュカ』 犬子蓮木

<http://text-poi.net/vote/41/5/>

投稿時刻: 2013.12.14 23:42

総文字数 : 1606 字

4 位 ☆ 3.800

『眠る衝動』 茶屋

<http://text-poi.net/vote/41/1/>

投稿時刻: 2013.12.14 22:55

総文字数 : 1304 字

(番外) ☆ 3.778

『錆色の女』 永坂暖日

<http://text-poi.net/vote/41/11/>

投稿時刻: 2013.12.14 23:57

総文字数 : 673 字

5 位 ☆ 3.727

『豆腐を買いに。』 秋吉君

<http://text-poi.net/vote/41/7/>

投稿時刻: 2013.12.14 23:45



総文字数：921 字

6位 ☆ 3.700

『鐘の音の行方』 げん@姐さん

<http://text-poi.net/vote/41/6/>

投稿時刻: 2013.12.14 23:44

総文字数：1168 字

6位 ☆ 3.700

『炎』 Wheelie

<http://text-poi.net/vote/41/9/>

投稿時刻: 2013.12.14 23:46

総文字数：537 字

8位 ☆ 3.667

『錆びない刀の秘血』 ちゃーち

<http://text-poi.net/vote/41/3/>

投稿時刻: 2013.12.14 23:39

総文字数：576 字

9位 ☆ 3.600

『アルファブロガー』 工藤伸一@ワサラー団

<http://text-poi.net/vote/41/8/>

投稿時刻: 2013.12.14 23:45

総文字数：779 字

(番外) ☆ 3.600

『痾』 太友 豪

<http://text-poi.net/vote/41/12/>

投稿時刻: 2013.12.15 00:10

総文字数：752 字

10位 ☆ 3.250

『我は報す』 司令@一字でも前へ

<http://text-poi.net/vote/41/2/>

投稿時刻: 2013.12.14 23:07

総文字数：441 字

---

1位 ☆ 4.000

『雪が降ると彼女のことを思い出す。』 司令@一字でも前へ

<http://text-poi.net/vote/42/7/>

投稿時刻: 2013.12.14 23:41

総文字数: 809 字

1位 ☆ 4.000

『メニカ』 犬子蓮木

<http://text-poi.net/vote/42/8/>

投稿時刻: 2013.12.14 23:43

総文字数: 2094 字

(番外) ☆ 3.900

『日焼け肌のメラノコリー』 工藤伸一@ワサラー団

<http://text-poi.net/vote/42/3/>

投稿時刻: 2013.12.14 23:20

総文字数: 1047 字

3位 ☆ 3.875

『雪』 Wheelie

<http://text-poi.net/vote/42/12/>

投稿時刻: 2013.12.14 23:46

総文字数: 508 字

4位 ☆ 3.800

『魔界都市 最強民族に越中泥棒困惑す』 しゃん

<http://text-poi.net/vote/42/9/>

投稿時刻: 2013.12.14 23:43

総文字数: 1233 字

5位 ☆ 3.778

『幻雪』 茶屋

<http://text-poi.net/vote/42/4/>

投稿時刻: 2013.12.14 23:23

総文字数: 1121 字

(番外) ☆ 3.778

『染めた男』 永坂暖日

<http://text-poi.net/vote/42/13/>

投稿時刻: 2013.12.15 00:11

総文字数: 682 字

6位 ☆ 3.750

『林檎の彼女 再び』 orksrzy

<http://text-poi.net/vote/42/10/>

投稿時刻: 2013.12.14 23:44

総文字数: 3394 字

7位 ☆ 3.700

『戻らない。』 秋吉君

<http://text-poi.net/vote/42/5/>

投稿時刻: 2013.12.14 23:25

総文字数: 987 字

8位 ☆ 3.625

『宇宙・この劇的なるもの』 小伏史央 (旧・丁史ウイナ)

<http://text-poi.net/vote/42/11/>

投稿時刻: 2013.12.14 23:44

総文字数: 2846 字

9位 ☆ 3.500

『いつかみた光』 松浦徹郎

<http://text-poi.net/vote/42/2/>

投稿時刻: 2013.12.14 23:15

総文字数: 1120 字

10位 ☆ 3.444

『スノウ、スノウ、スノウ』 碓氷穰 (元うわああ ( r y )

<http://text-poi.net/vote/42/6/>

投稿時刻: 2013.12.14 23:32 最終更新: 2013.12.14 23:46

総文字数: 2109 字

(番外) ☆ 3.000

『きみのために。あと余った分をわたしに少し分けて欲しい』 太友 豪

<http://text-poi.net/vote/42/14/>

投稿時刻: 2013.12.15 00:12

総文字数: 427 字

11位 ☆ 2.875

『雪印乳業の思い出』 ひやとい

<http://text-poi.net/vote/42/1/>

投稿時刻: 2013.12.14 22:46

総文字数 : 448 字

※ 獲得☆票の内訳につきましては、てきすとぼい杯の会場にてご確認ください。

紅組会場 : <http://text-poi.net/vote/41/>

白組会場 : <http://text-poi.net/vote/42/>

《大賞・紅組優勝》

---

獲得☆ 4.222

『脱出ポッドの三人』

<http://text-poi.net/vote/41/4/>

著：るぞ

爆発する宇宙船から飛び立つ脱出ポッドに乗り込めたのは、たった三人。  
しかしポッドが不時着した星、それは草一つ生えぬ不毛の大地だった。  
備えられた酸素と食料はごく僅か。三人のうち、はたして生き残るのは……？  
即興ながらも巧みに構成されたサバイバルSFが、紅白26作品の頂点に輝きました！

《白組優勝2作品》

---

獲得☆ 4.000

『雪が降ると彼女のことを思い出す。』

<http://text-poi.net/vote/42/7/>

著：司令@一字でも前へ

大雪の降った、ある冬の夜。買い物帰りの私が見たもの――それは、  
派手に壊れた雪だるまがひとつと、雪の色をしたセーターを着た女性。  
この彼女の正体は、そして主人公の運命は……？  
世界が雪で染まる季節の、ちょっと不思議な物語。白組優勝1作品目となりました！

獲得☆ 4.000

『メニカ』

<http://text-poi.net/vote/42/8/>

著：犬子蓮木

メニカは、今ではもう少なくなってしまった、魔法使いの末裔だ。  
魔法使いには、魔法使いにしかできない仕事がある。それで生計も立て、家族を養いもする。  
けれど、幼いジュカにはまだ話していなかった――それがどんな仕事なのかは。  
紅組入賞作品『ジュカ』と連動する魔法使いと少年の物語が、白組優勝2作品目となりました！

## 《勝利組》

---

紅組平均 ☆ 3.776

白組平均 ☆ 3.668

かなりの接戦となりましたが、紅白組対決は「紅組」の勝利となりました。

## 《入賞3作品》

---

紅組 獲得☆ 4.200

『S & M』

<http://text-poi.net/vote/41/10/>

著：豆ヒヨコ

作られた清らかなパブリックイメージ、女優として傷のないキャリア。  
映画の主演と、すぐ後に控えるリッチな結婚……その全てを掻き乱すような、  
ある人物と、ある感情と出会ってしまった彼女は――。  
生々しくも妖艶な女優の内面を描き上げた、総合2位の女性文学作品です。

---

紅組 獲得☆ 3.889

『ジュカ』

<http://text-poi.net/vote/41/5/>

著：犬子蓮木

ジュカは、普通の人間だった。それも、まだ子供の。  
だからメニカは教えてくれない。魔法使いの彼女が、どんな仕事をしているか。  
けれど、次の機会には必ず、仕事に出るメニカの後をこっそり追って行く決めていた――。  
白組1位タイ作品『メニカ』と連動する魔法使いと少年の物語が、同じく高評価を獲得しました。

---

白組 獲得☆ 3.875

『雪』

<http://text-poi.net/vote/42/12/>

著：Wheelie

百年も前の核爆発が生み出してしまった、昼のない世界。  
氷と夜空に覆われた、暗い北半球で、ヒカルとユキエの二人は  
シェルターで見つけた古い古い映像記録装置をいじっていた――。  
どこか切なく懐かしい、隔絶された北半球と南半球の物語。紅組作品『炎』もぜひ一緒に。

---

### 《特別賞》

---

#### 《トップオブ連結作品賞》

『ジュカ』

<http://text-poi.net/vote/41/5/> （紅組）

『メニカ』

<http://text-poi.net/vote/42/8/> （白組）

著：犬子蓮木

紅白連結2作品のうち、白が同点優勝、紅が入賞という、高い評価を獲得した作品でした。

---

#### 《NGワードを言ってみろ賞》

『魔界都市 最強民族に越中泥棒困惑す』

<http://text-poi.net/vote/42/9/> （白組）

著：しゃん

作中で、お題の禁止ワードをメタ的にいじり尽くした、愉快的な作品でした。

---

#### 《年末総出演賞》

『宇宙・この劇的なもの』

<http://text-poi.net/vote/42/11/> （白組）

著：小伏史央（旧・丁史ウイナ）

今年、てきすとぽい杯に投稿された同著者の登場人物が総出演する、豪華な作品でした。

---

#### 《男と女は解り合えない賞》

『戻らない。』

<http://text-poi.net/vote/42/5/> （白組）

『豆腐を買いに。』

<http://text-poi.net/vote/41/7/> (紅組)

著：秋吉君

男性視点の白と女性視点の紅、2作品の強烈な落差が楽しい、連作性を活かした作品でした。

---

《無修正ホワイト露出賞》

『日焼け肌のメランコリー』

<http://text-poi.net/vote/42/3/> (白組)

著：工藤伸一@ワサラー団

禁止ワードの使用で惜しくも選外となってしまいましたが、  
大真面目な露出描写が高い評価を獲得しました。

---

《赤は白の中に、白は赤の中に賞》

『錆色の女』

<http://text-poi.net/vote/41/11/> (紅組)

『染めた男』

<http://text-poi.net/vote/42/13/> (白組)

著：永坂暖日

惜しくも制限時間後の投稿となってしまいましたが、  
紅白の禁止ワードを対抗組への投稿作品に盛り込んだ、非常に挑戦的な作品でした。

――受賞された皆さま、おめでとうございます！  
素晴らしい作品をありがとうございました。

(次のページから、作品が始まります。)





投稿時刻 : 2013.12.14 23:40

最終更新 : 2013.12.14 23:46

総文字数 : 2299 字

獲得☆ 4.222

《大賞・紅組優勝作品》  
脱出ポッドの三人  
るぞ

俺たち三人だけが、脱出ポッドから出ることが出来た。

他はそもそも乗ることさえ出来なかった。みな爆発する宇宙船の中で死んでしまった。

降り立った俺達が、振り返ってまず最初に見たものは、無論のこと命を助けてくれたポッドの姿だった。

燃え盛り、爆発を繰り返す宇宙船から脱出してきたためだろう。

脱出ポッドはうっすらと焦げ付いていた。頼りなく見えるが、脱出の役には足ってくれた。

ポッドは着地時の衝撃を抑えるための、重力調整機能を搭載しており、これは着地時の衝撃を抑えるのみならず、乗員が降りる際には、スムーズに活動できるよう、周辺の重力を地球と同じ強さに保つ機能がある。

おかげで俺達は、安全に外に出られた。

だが、同時に絶望も外には待っていた。

窓のないポッドから出た俺達が見たものは、案の定不毛の大地であった。

生物が棲めるようには見えない。

それはそうだろう。

この辺りで、空気の層を保てるほどの大きさがある星は、MZ星の一つしかない。

MZ星はテラフォームされているため、人間が生きていける濃度の大気があるはずだが、逆に言えばテラフォームされたはずの土地が、こんなに不毛なわけもない。

他の星は小さすぎて、いずれも大気の層そのものがない。

と、宇宙服を着た同乗者のうちの一人(女ということは憶えている)が声を上げた。

「待って、あれ……なに？」

女が指差した方には、巨大な鉄くずの残骸とも言うべきものが聳え立っていた。

内部がむき出しになった状態で、錆付いた巨大な鉄の塊。

俺は思い出していた。

遠い昔この近辺の宙域にあったという、ステーションのことだ。

確か何らかの事故で、俺達の宇宙船の様に爆発四散して、近隣の星々にパーツが墜落したらしい。

長い年月を感じさせるように、残骸はぼろぼろに錆付き、見る影もなかった。

「人の痕跡よ!! 人間の痕跡だわ!! 私たち助かったのよ!!」

女がふらふらと、錆付いたステーションの残骸の方へと駆けていった。

「おい待てっ」

俺の声はトランシーバ越しで彼女に届いていたはずだが、女は振り向きもせず行ってしまった。

「馬鹿女め……」

いや、馬鹿というよりはこの過酷な状況で、気がおかしくなってしまったのだろう。

長い間の宇宙船の楽ではない生活の後、ギリギリの状況で他の船員を押しつけて脱出ポッドにこぎつけ、たどり着いたのがこんな場所では、いっそ彼女の様に狂気に走ったほうが楽だったのかもしれない。

どのみちあんなボロボロのステーション跡に、まともに使える道具など残っているまいに。

「残ったのは俺とお前だけか……」

「……………」

もう一人の同乗者は、しかし黙ったまま、宇宙服のポケットに手をいれ、奇妙な柄のようなものを取り出した。

高周波ブレードだ。血も流させず、何もかも焼ききる。

「だろうな」

俺は自嘲した。

それはそうだ。ポッドに残された物資は僅かだ。

わずかな代えの酸素パック。わずかな水。

少しでも長く生き延びて、救助を待つには、とてもではないが二人分はない。

特に酸素は、一日ともたないはずだ。

うかつにポッドから離れた女には、もはやこれらの物資を手に入れる手段はなくなったと言える。

だが、残りはまだ二人いる。ならば、生きるためにすることなど、一つしかない。

中の人姿を見た事がないため、性別も人種もわからない宇宙服の相手は、無言でこちらに切りかかってきた。

今俺が着ている宇宙服であろうと難なく切り裂けるだろう、高周波ブレードだが、俺も無抵抗なわけがない。

ポッドに密かに持ち込んでいた、携帯用火炎放射器を構えて相手に向け、トリガーを引いた。酸素と可燃物質の両方をまくため、宇宙でも使える代物だった。

殺人だ、と迷っている暇はない。生きるか死かだ。

高周波ブレードに火炎放射器の燃料をぶちまければ、地球では大爆発が起こってどちらも死ぬだろう。

だが、ここは大気のない真空空間だ。リーチではこちらに分がある。

俺は生き残るのだ。絶対に。

---

「本当に奇跡だわ」

私は、宇宙服を脱ぎ捨てながら、笑うしかなかった。

錆付いた宇宙ステーションの残骸の下で、笑っていた。

何か残っているものがないか見回してみたが、さすがに何も残ってはいない様子だった。

まあ、仕方あるまい。ステーションの錆を近くでしっかりと確認できたのだから、それで十分だった。

そう、長い年月を物語るように、ボロボロに錆付いていた。  
この辺りの星は小さすぎて大気自体がないか、あるいは MZ 星というテラフォームされた土地か、どちらかしかあり得ない。  
物がこんなに錆びているのなら、それはつまり物を腐食させるだけの大気があるということだ。  
MZ 星の酸素に他ならない。  
辺りは不毛の土地だが、単純にこの辺りが、砂漠気候だっただけということだろう。  
テラフォームしても土が悪かったりすると、どうしても砂漠地帯は出来る。  
そういう意味では、大当たりの落下地点とは言いがたいが、しかし砂漠地帯はそう広くなかったと記憶している。  
おそらく歩いていける範囲内に、人の住む土地があるだろう。  
「まさか、沢山の星の中から、MZ 星に落ちるなんて、神様の思し召しは、本当にあったのね」  
私は、そういえば同乗者の二人を置いてきてしまったことを思い出した。  
ポッドの中ですごした時は、とてもギスギスしていた。  
怖い人達だったけれど、それは生きるか死ぬかの状況で気が立っていたからだろう。  
二人が来ないのであれば、しばらくしてから迎えに行ってもいいかもしれない、と思ったが、とまれしばらくは、宇宙服の中では長らくお預けだった、空気に満ちた風を体中の肌で味わっていたかった。

※作品集への掲載にあたって、誤字等を一部修正しました。



投稿時刻 : 2013.12.14 23:46

総文字数 : 2105 字

獲得☆ 4.200

《入賞作品》  
S & M  
豆ヒヨコ

私は脱いだわけでもない、卑猥な言葉を吐かされたわけでもない。

監督はただ、「道端に膝まずいて泣け」と言った。苛立ちを全身に含ませて、アスファルトの道路の片隅を指さして、静かに指示した。ぶつかった目線を私は忘れない。彼は本気で『やらないなら殺す』と伝えていた。遠くでマネージャーが怒り狂いスマホ片手に怒鳴り散らしているのが見えた。監督の指示は想定外にクレイジーすぎた。契約ともパブリックイメージとも恐らく違いすぎたし、私はこれからリッチな結婚をしてさらに商品価値を上げるところで、その前にちょっとした前衛風の映画に出てキャリアアップしておこうというだけだったのだ。

でも私はそれを決行した。

彼の鋭く細い瞳は私を瞬時にノックアウトしたし、がむしゃらにすがりついて愛していると言う代わりに、私は全身で演じるしかなかった。私はスカートを破り暗闇の中でひざまずいて泣いた。泣いて泣いて、喉が炎で焼かれ枯れ果てるまで泣いた。美しさも見栄えも何も考えず役柄になりきれたのは初めてのことだった。「カット！」の声で我に返り、必死で監督を振り向いたが彼はすでに椅子を蹴って去ってしまっていた。

\*\*\*

「最優秀主演女優賞、おめでとうございます！ それから……ご結婚も」

私は有難うございますと答え、照れた気持ちで微笑んだ。

カメラのフラッシュが光った。表情がほぐれた瞬間をとらえたいのだろう。この取材――三十代以降の女性をターゲットとしたファッション誌の巻頭特集――では、親しみやすい雰囲気求められているのだ。私は軽く首をかしげ、瞳の力をほどいて柔らかく微笑む。立て続けにシャッターが切られる。顎に左手を添わせてみる。もらったばかりの婚約指輪がおそらく派手に輝いて、また連続シャッター。

「お相手はイギリスの方のことですが、どういった経緯で？」

百回は繰り返される質問。幸福な言葉たちを、私はもはや自動的に零す。

「もともと父があちらの駐在員なの。オフの時期に遊びにいて、ホームパーティで出会いました。父と彼は、実は同じ会社で働いていて……なので家族ぐるみという感じですね、ふふふ。ちょうど彼が日本支社に赴任したので、タイミングかと入籍を決めました」

マネージャーがちらりと腕時計を見、次いで取材クルーを見つめる。

タイムアップだ。察したライターは「なるほど。では、次が最後の質問になりますが」と前置きして、ペンを構えなおす。

「結婚後も、お仕事は変わらず続けられる予定ですか？」

私は頷こうとして、何故かうまくいかず漫然と微笑んでしまう。

もちろん、と答えなければならない。そういう契約が、事務所とすでに決まっている。夫となる人も納得済みの事実だ。なぜ頷けないのだろうか？ いつもここが上手くいかなかった。マネージャーがすっと立ち上がり、「これでよろしければフォトセッションに移ってください」と強引にめた。沈黙が辺りを包んだ。ライターがわずかに眉を寄せる。けれど質疑応答は受け入れられない。インタビューは瞬時に断ち切られ、私は微笑んだまま、流されるようにヘアメイク室へ歩いていく。

私は、生まれつき淡泊な性質だった。

なにかを飢えるように欲したり、誰かに憧れてたまらなかつたり——私は、そういった思いを抱いたことが、かつて一度もなかった。必要なものは大抵手に入ったし、求められたことは大方すぐに出来た。要領がよいせいもある（周囲より大分よかった）。何より、上手くやれないほどレベルの高い環境を選ばない才覚があったと思う。だから、あの監督作品に出られたのは僥倖という外ない。ああなることが分かっていたら、かつての私なら、決して参加しなかったはずだから。

側頭部をカールしてもらいながら、私はそっと目を閉じる。

痛々しいほど瘦せた肩とひよろ長い背丈、切れそうに鋭い眼光。監督はいつも黒ずくめで、だから私はすぐに彼を見つけられた。触れそうで触れない指先、そういえば私たちは手をつないだことさえない。怒りに満ちた目で睨めつけられる度、自分が不思議な興奮に満ちていくのを感じた。決して荒げない、けれど怒気をはらんだ声で「さくらさん違う」と私を否定する監督が、恋しくてたまらなくて泣いてしまいそうになる。彼は二度と私をブッキングしないだろう。使わないだろうからこそ、激情は募った。拒絶されることがこんなにも美しいとは考えたこともなかった。これからの人生、あの甘美な傷なしで生きていけるのか、私にはもう分からなくなっていた。

スタジオは、シルクに似た素材の布地で覆われ白々としている。

私は血のようなロングドレスを纏い、その中央に座る。だるい気持ちで見上げると、先ほどのカメラマンが手持ちで一眼レフを構え立っている。私は錆びついたように惰性で微笑みかけた。ふいに彼はカメラを眼前から除け、すっと目を細めて私を見据えた。

「……Mですか？」

彼はやはり痩せていて、その眼光はナイフのように鋭い。私は何も答えられない。

ふっと笑い、若いカメラマンは再び機器を両手に構える。

「いいっすね、俺、好きですよ」

私の頬に、猛烈な勢いで血流が集まる音がする。そこには、誤魔化せない真実が満ち満ちている。



投稿時刻 : 2013.12.14 23:41

総文字数 : 809 字

獲得☆ 4.000

《白組優勝作品》  
雪が降ると彼女のことを思い出す。  
司令@一字でも前へ

ある冬の晩、私は親に頼まれて牛乳を買いに出かけた。

昨日から降っていた雪のおかげで、道路は一面の雪畳に覆われていた。この地方には珍しい大雪だ。

帰り道、牛乳が入ったビニール袋を提げた私は、ふと、あるものを見つけた。

それは誰かが作ったであろう雪だるまだった。

しかし、それは何故だか壊れてしまっていた。

作った人が出来栄えに満足せずに崩したのか、心無い通行人が蹴っ飛ばしたのか、雪だるまは見るも無残な姿になっていた。

何だか可哀想になった私は、この雪だるまを直すことにした。

私はビニール袋を雪布団の上に置く。そして崩れた雪の欠片を掻き集めて固め、まだ綺麗な雪面にコロコロと転がして形を整えていった。

「よし、できた」

苦闘の末に、雪だるまは見事に復活した。

私は満足して再び帰路についた。

それにしても、冬の晩はかなり冷える。

雪は音を吸うというが、不気味なくらい静かだった。

いきはよいよ帰りは恐いと言ったもので、私は急に心細くなった。

「ねえ、君」

そんなとき、後ろから声をかけられて、私は身をすくませた。

驚いて振り返ると、雪色のセーターを着た綺麗なおねえさんが立っていた。肌の色も透き通るような雪色

だ。高校生くらいの背格好に思える

「怖いの？ 一緒に歩いてあげようか？」

何故だか私は断る気になれなかった。

私は黙って頷いて、歩き出した。

おねえさんも歩調を合わせてついてくる。

何か話をするでもない。

けれど彼女と一緒にいると何故だか心が安らいだ。

それで油断していたのだろうか。

ふと、目の前で何かがキラリと光った。

それが車のヘッドライトだと気づいた時には、もう遅く。

私は強い衝撃で弾き飛ばされていた。

そして、鈍い音。

おねえさんが車に轢き飛ばされた。

咄嗟に私を突き飛ばし、彼女は身代わりになったのだ。

私は一目散に彼女へと駆け寄った。

車の運転手も慌てて出てきて私に続く。

彼女の姿を見て、私たちは固まった。

そこには崩れた雪だるまが一つ、あるだけだった。



投稿時刻 : 2013.12.14 23:42

総文字数 : 1606 字

獲得☆ 3.889

《入賞作品》

《特別賞・トップオブ連結作品賞》

ジュカ

連結作品 [メニカ](#) はこちら

犬子蓮木

0

僕は眠っていた。

メニカはまたどこかに行っているらしい。魔法使いは夜に仕事をするんだよって彼女は言う。子供はなにも心配しなくていいから、と僕にくわしいことは教えてくれない。

だから僕は、次のときこそメニカの後を追いかけてみようと思うんだ。

今日はダメだったけど、次こそは。

2

僕は眠ったふりをしている。

メニカに仕事が入ったことを知っていた。だから今日こそあと追いかけてどんなことをしているのか確かめてやろうと思っていた。

街のイヤな奴がいうみたいにおかしな仕事をしてないって証明するために。

足音が聞こえた。

僕は寝返りをうって扉を背に布団の中でまるまる。

扉が開いた。メニカだ。長いローブをひきずるような音がする。メニカは僕のベッドのそばに寄ってきたらしい。メニカが僕のあたまの上の布団をあけた。

バレないようにうその寝息をだす。

大丈夫だろうか。



メニカは魔法使いだ。

でも、心は読んだりできないって言ってた。

だから大丈夫なはず。

もしそんなことできるならもっと早くから怒られてるはずだし。

「いってくるね」

メニカが小さな声でつぶやいた。

僕はドキドキしてふるえている。

なんだかすごいやさしそうな声だった。

どこにいくのだろう。

いってらっしゃい、と僕は心の中で言ってから、追いかけるからねってじぶんと約束した。

布団があたまの上に落ちてきて、びっくりしてたら、扉が閉まる音がした。

#### 4

僕は布団の中で震えている。

メニカの後を追いかけて、メニカの仕事がなにかを見てきた。そこでメニカがやったことはまったく信じられないものだった。

足が痛い。帰りに慌てて走ったときに転んでしまった。血がでたけど、かまわず逃げるように帰ってきた。

玄関の扉がしめる音。メニカだ。帰ってきた。

僕はぎゅっと小さくなる。メニカが僕の部屋に近づいてくる足音が聞こえた。そして扉がひらく。

「ただいま」

メニカが言った。小さな声。僕が起きていると思ってはいないだろう声だ。

メニカが僕のかぶっていた布団を静かにずらす。

眠っているふりをしよう。なにも見なかったことにしよう。そう思ったけど、ダメだった。僕の震えはとまらなくて、メニカが驚いたような声をあげた。

「ジュカ、どうしたの？」

メニカが僕の額に手を置く。それから僕のからだを軽くゆすった。

「……うん」

僕はいま起こされたとでも言うようなふりをして、メニカのほうに体を向けた。

「寒い？ 顔まっさおだよ」

メニカが杖で床をコツンと叩くと錆びついた燭台が伸びてきて、その先に火がともった。

「火にあたりな。それとも暖炉のところへ行こうか」

#### 6

「メニカは人殺しなの？」

僕は震えながら言った。

暖炉の中で炎がこうこうと燃えている。

僕は、メニカが女の子の命を奪うところを見てしまったのだ。

メニカは、僕がメニカの仕事を見た、と言った瞬間から目を大きく開いて黙っていた。いっしゅん、怒られるかと思った。でも怒らなくて、ふう、と息を吐いてからメニカが話してくれた。

「そうだよ」

メニカが言う。

「お金をもらうために、そういうことをするときもある。もちろんしないときもあるけど」

メニカが真剣な表情で僕を見つめる。それからいろいろ説明してくれた。

「生きていくために命を奪うことは仕方がないことだよ。魔法使いでなくても、何かを食べて生きている」

僕はメニカの話の間こうとするけど、どうしてもなんだかわからない。

「わたしのこと嫌いになった？」

「うん……そんなことするメニカは嫌い」

「そっか……」メニカが暖炉の火を消した。「いろいろ混乱してると思うからもう寝なさい」

メニカが僕を連れるように立つ。一緒に部屋へと戻って、僕は布団の中にはいった。

「見たことを他の人に言わないということだけは約束して」

「……うん」

「よし、偉いね。それじゃあおやすみ」

メニカの唇が僕の額にあたる。

僕は返事をできなくて、ベッドの中で涙を流して、いつのまにか眠ってしまった。

夢は僕がメニカに殺される夢だった。



投稿時刻 : 2013.12.14 23:43

総文字数 : 2094 字

獲得☆ 4.000

《白組優勝作品》

《特別賞・トップオブ連結作品賞》

連結作品[ジュカ](#)はこちら

[メニカ](#)

[犬子蓮木](#)

1

夜。

たすけてくれ、と目の前の人が出た。

その言葉は聞いた。だけど無視した。

古びた木の杖の先から、光を発生し、目の前の人を照らす。影が伸びて路地裏の壁に高く広がった。そしてだんだんとその影が短くなっていく。光が弱くなったわけではない。目の前の彼が、ゆっくりと光の取り込まれて消えていったのだ。

わたしは魔法使い。

蒸気技術が栄えた今ではもう少なくなってしまった魔の者の末裔だった。数が減ったということは仕事にありつける可能性が高いということである。仕事さえ減らなければの話だが、仕事の減る心配は当分しなくてよさそうだった。

だって、世の人間は、人間を憎むようにできているのだから。

3

雪が降ってきた。こういう日はできるだけ早く帰りたくなる。寒いわけではない。魔法を使えば、じぶんの周りの気温ぐらいは自由に調節できる。ただ、家で眠っているジュカが心配だったのだ。

風邪をひいたりほしくないだろうか。

家を出たとき見た感じでは、布団をしっかりと被っていてすやすや寝息をたてていた。たぶん、心配のし

すぎなんだろう。なんだから笑えてくる。

じぶんの子供でもなんでもない、ただ偶然引き取っただけの男の子に、どうしてこのわたしがそんなになってしまったのかはわからない。

きっとジュカだけが使える魔法なんだろう、なんてやっぱりわたしらしくないことを考えてしまう。

さあ、今日も仕事をしよう。

ジュカを育てるにもお金がいる。

今日のターゲットは決まっていた。ある家の娘。親が誰かに恨まれていて、それでわたしのところに依頼があった。かわいそうだけど、消えてもらうしかない。

かわいそうだけど……。生きる為に他の生物を殺すことは許されている。法ではなく、世の在り方として。

ターゲットの家の少し前で姿を消した。それからゆっくりと近づいて門を開ける。部屋の場所はわかっていて。壁に穴をあけて、彼女の部屋へと入る。

少女が寝ていた。

年齢は十歳。ジュカと同年だ。

すやすやと寝息をたてていて、きっと親からしてみればものすごくかわいいのだろうな、というのがわかる。以前はわからなかったが、ジュカと過ごしたこの一年ぐらいで、それがわかるようになった。

だけど、わかるだけだ。

持っていた杖に力を込める。

杖の先が光、その光が少女を包み込む。この光が外にもれることだけが心配だ。さらに上から魔法をかけることで消すこともできるけれど、そこまで考えるのはめんどろだった。

まあ、すぐに終わる。

ちょっとぐらい噂が広まっても問題はないだろう。

光をとめる。

かわいらしく寝ていた少女はもうこの世には存在しない。否、姿だけは残しておいた。さきほどと同じように目を瞑っているが、動きはもう、なにもない。

肉体を消さなかったのはサービスだ。

それぐらいはこの子の親に残しておいてあげてもいいだろう、と思った。不思議なことだ、と思う。今まではそんなことを考えたこともなかったのにね。

「ごめんね、殺しちゃって」

わたしは女の子の頬を撫でた。それから手を上にあげて、体をのばす。

さあて、帰るとしようか。

あ、壁は戻しておかなくっちゃ。

家に帰ったら、ベッドの中でジュカが青ざめて震えていた。どうしたのだろうか。魔法で火を出してあげたけど、それだけで大丈夫なようにはならなかったのだから、ジュカの部屋から暖炉のある部屋へ連れて行った。

暖かい山羊の乳をコップにいれて、少し砂糖をまぜてからジュカに渡した。

「大丈夫？」

「……うん」ジュカが力なく答える。

「悪い夢でも見た？」

「ううん……」

「寒かったからね、調子悪くなったかな。そうだ、雪が降ってるよ。朝になって元気になったら遊ぼうか」

「知ってる……」

なんで知っているのだろうか。ずっと寝ていたら、気付かないはずだ。途中で起きて窓の外を見た？ この部屋に来るまでの廊下には窓はないし、この部屋のカーテンはしめている。

「僕、メニカの仕事を見ちゃったんだ」

## 7

どうやらジュカはわたしが人を殺すところを見てしまったらしい。

説明をして、少しだけ落ち着かせてから部屋まで連れて行って眠らせた。

さて、どうしよう。

こういったことを解決できる魔法は存在しない。存在しないから、魔法使いは迫害されてきた。

人間と魔法使いは価値観が違う。生きる為に肉を食う人間は多いが、生きる為に人を殺すことを良しとする人間は少ない。魔法使いはそこに境を作らないのだけど。

カーテンをあけると雪がつもっていた。

やわらなくて暖かそうだ。

だけどさわると冷たいということも知っている。

難儀な世の中だよ、まったく。

見ている思っていることと経験の違い。意識と価値観と生き方の違い。個人差、種族差に性差。違いばかりで軋轢と混乱と争いが生まれる。

そんな諍いから仕事をもらっている身だけど、もう少し平和でもいいよな、と思う。

じぶんの周りぐらいは。

だけど、そんな違いをおもしろいと思うじぶんもいることは確かだった。

そうでなければ、魔法使いでもない人間の子供なんてひきとったりはしない。

ねえ、ジュカ。

わたしは魔法をひとつ唱えた。

なんてことはない、子供が元気になるおまじないを、ひとつだけ。

たったそれだけをして、眠ることにした。



投稿時刻 : 2013.12.14 23:46

総文字数 : 537 字

獲得☆ 3.700

## 炎

連結作品[雪](#)はこちら

Wheelie

最後の大战が終わった後、この星の気候は完全に狂ってしまった。

「北半球からの映像？」

畑仕事から帰ってきたマークが、拭きながらモニタを覗きこむ。

「海底ケーブルは全て破壊されたし、衛星も機能していない。そもそも北半球は人間が生存できる環境じゃないんだ」

この国を含む南半球のほとんどに、夜は訪れない。

「けどこれはなんだ？」

ジョーイはウィンドウを開く。錆びついたラップトップの液晶に映しだされていたのは、漆黒の空に降り積もる雪。

「百年前の戦争でたくさんの血が流れた。もし北半球に生き残りがいたとしても、シェルターの中で餓死しているはずだって、じいちゃんが言ってた」

「映像のタイムコードは今日の日付だ。これはリアルタイムで送られてきてるんだよ」

「あっ！」

ジョーイが声を上げる。銀世界に溶け込むような、真っ白な服をきた少女が映像に映し出される。

「人間……？」

自分たちとは違う青白い肌。二人は食い入るようにモニタを見つめる。

少女は星空を見上げて、それからもう一度こちらを向く。唇が小さく動く。なにかを伝えようとしている。

「行こう」

「どこに？」

「北半球に、彼女たちのいるところに」

人生を賭けでも行かなければと思う。ジョーイは納屋からいくつかの植物の種を取り出す。

太陽が炎のように輝いていた。



投稿時刻 : 2013.12.14 23:46

総文字数 : 508 字

獲得☆ 3.875

### 《入賞作品》

連結作品炎はこちら

雪

Wheelie

百年前に起こったいくつかの核爆発が原因で、この星の地軸はずれてしまった。人間たちは気付いていなかったのだ。自分たちが大きな力を持ちすぎてしまったことに。

「またそれで遊んでいるの」

ヒカルの声に、ユキエはカメラを一時停止する。

「うん、おもしろいよ」

シェルターから見つけた小型の映像録画装置。たった今録画した映像をヒカルに見せる。

「雪ばかりだね」

「うん、それと星空」

北半球のほぼ全域に、もう昼は訪れない。氷と夜空に覆われた世界。

「操作方法はなんとなくしか分からないけど、このボタンはなんだろ」

適当に押したボタンが、蛍色に光る。

「ヒカルを写してあげる」

彼女は恥ずかしがるように後ろを向く。雪と同じ色の服が風に揺れる。

「昔の服って、植物から作られてたらしいよ」

「乳製品じゃなくて？」

「うん」

二人とも植物を見たことがなかった。家畜は微生物から合成された飼料を食べ、彼女たちはその乳と肉、骨と毛皮までを余すことなく使う。そうやって生き延びてきたのだ。

「植物」

ヒカルは星を見ながらなにかを考えている。

「見てみたい？」

ユキエの言葉に彼女はゆっくりと振り向き返事をする。

「花を見てみたい」

誰に届くわけでもない言葉を、小さく吐き出した。





投稿時刻 : 2013.12.14 22:55

総文字数 : 1304 字

獲得☆ 3.800

## 眠る衝動

茶屋

鮮血が舞った。

手に入れた当初は錆だらけで使い物にならなさそうな刀だったが、修復してみれば良い刀である。

その刀に出会ったのは家の蔵を整理していた折である。

祖父が奇妙な死を遂げて、誰もいなくなった父の実家にその蔵があった。葬儀をすませ、ようやくゆっくりできる段になった時、庭を何となく歩いているとその蔵が目についた。その蔵は血で染めたような夕焼けで塗り上げられ、それと影が織りなす異様な色調でその存在感を際立たせていた。

あの中には何が収められているかと父に問うてみると、父は小さく首を傾げ煙草の煙を吐き出すだけだった。

疎遠だった祖父の印象はあまりないが、その眼光だけはなぜか思い出される。

闇。

闇の中で浮かぶ、二つの目。

鋭く、鋭利で、触れただけで怪我をしまいそうな。

そんな光景だけが目に浮かぶ。

祖父は一体何者だったのか。よくわからない。

ただ、あまり父も語りたがらないことから察するに普通の職業ではなかったのだろう。

それは今この刀を持って痛感している。

普通の刀ではない。美術品として取り扱われるようなたぐいのものではもちろんない。

この刀は生きているのだ。

そう思った。

生きるために、血を求めている。

そう思った。

研ぎ澄まされたその刀身を目にした瞬間、そう確信したのだ。

錆付いていた時の刀は半ば死んでいたのだと思う。けれども、微かには生きていたのだろう。生きて、血を求めたのだろう。

それを気づいていたのか、気づいていなかったのか。

少しは金にでもなるかと思ひ何となしに修復に出し、帰ってきたその刀はもはや祖父の骨董品ではなくなっていた。

美しく、魅惑的で、それでいて清楚で卑猥。無邪気でありながらも計算づくで。時に冷たく、そして優しい。

一瞬で刀の虜になったの言うまでもない。

血だ。

この刀のために、もっと血を。

おそらく、祖父もこの刀に血をくれてやっていたのだろう。

それが何となく分かる。

刀にとってのむかしの男。

恥ずかしい話だが、祖父にいささかの嫉妬のような感情を覚えたのも確かである。

だが、何故祖父はこの刀を錆びるがままに任せていたのだろうか。これほど蠱惑的な刀を手放せるほどの精神力を持っていたのだろうか。

分からない。

少なくともあの目。

あの祖父の眼光は刀を持ったものの、血を求めるための目だったのではないか。

祖父もあの鋭利な眼差しで、血を求め、刀のために獲物を斬ったのではないか。

そう思えてならないのである。今の私の目と同じように。

血が舞う。

炎とともに。

鬼が叫んだ。

どれも、同じ色だ。血と炎と鬼の色が交じり合い、境界が融け合う。

父も祖父が何をしていたか、知っていたに違いない。

祖父は刀を持って斬った。斬りに、斬った。

殺人鬼？

まさか。

刀は人の血なんかじゃ満足しやしない。

刀が求めているのは人ならざる者の血だ。鬼の血だ。

炎が柱を伝い、天井へと広がっていく。

血を焼き、鬼を焼く。

刀を手にした瞬間、この場所、祖父の家で手にした瞬間、すべきことがわかったんだ。

斬るべきをものがわかるようになったんだ。

祖父のあの眼光は、多分、それを見るための目だったんだ。

だから、祖父は刀を封印したんだ。

父を斬った瞬間、それがわかったような気がした。



投稿時刻 : 2013.12.14 23:43

総文字数 : 1233 字

獲得☆ 3.800

《NGワードを言ってみろ賞》  
魔界都市 最強民族に越中泥棒困惑す  
しゃん

それは年が明けて間もない、一月の日曜のことだった。  
渋谷駅の南口には、突如としてまばゆい球体が現れた。  
バスターミナル周辺を行きかっていた人々は足を止め、血の気の引いた顔で何かと息を呑んでいた。  
近頃では、日本も徐々に不穏な空気に包まれつつある。  
新手の兵器か、あるいは常識を超えた何らかの自然現象なのか。  
自然のものとも、人工のものともつかない球体の強い輝きに人々は恐怖を抱いていたが、立ち去る者は一人もいなかった。  
一体これから何が起きるのか。  
身の危険よりも、好奇心が先に立っていたのだろう。

「なあ、あれはなんだ？ テレビ局の悪戯か？」  
「つか、お前、ホワイトを日本語で言ってみろよ」  
「し・・・って、NGワードだろ、それ！」

混乱しているようで、群衆は予想以上に冷静だった。  
都会の人々は、基本他人のことには無頓着だ。  
興味があるとすれば、それが自分にとって得なのか損なのか。  
この街に暮らす者なら老若男女とわず、その程度のことは誰でも知っていることだった。

果たしてあの謎の球体は、我々にどのような影響を及ぼすというのか。  
固唾を呑みながら人々が見守る中、球体は徐々に圧縮されるようにしぼんでいった。  
やがて球体は光の筋となり、そして人の形へと変貌していった。  
雪のように小さな光が弾け飛び、気がつけばそこには見慣れない出で立ちをした西洋人が呆然とした面

持ちで 立ちすくんでいる。

「オー、ドコデスカー、ココーハー。ワタシノ芸者ガール、ドコイキマシタカー。セツカク、イイ気分デ乳  
クリアッテイタノニ、ナンナンデスカー」

西洋人は、古めかしい軍服を着ていた。しかし、よく見れば銃器の類を所持しているわけではない。ほんの数秒の間、人々はその特異な光景を分析していた。そして、西洋人の慌てふためく様を見ているうちに、一つの確信を得るに至ったのだ。

こいつは、無害だ。おそらくタイムスリップか何かで、戦後の日本から飛ばされてきたのだろう。

安堵の溜め息と、気落ちした声あたりを支配する。

「んだよ。時空のポケットに落ちた奴が、たまたまここに現れただけか。俺らにはなんのメリットもない話  
じゃーん」

一人のつぶやきに呼応するかのように肯くと、人々は踵を返し、各々の目指す方向へ散らばった。

西洋人に関心を抱く者は、もはや一人もいないようだった。

「ふえええ。どうして？ なんで、みんな驚かないの？ タイムスリップだよ？ タイムスリップ」

たまたま北陸某所から上京していた作家志望者は、泣きそうな顔を右に左に向けていた。

驚くべきは、未来から飛ばされてきた軍人ではなく、冷淡な魔界都市の住人だ。

小説は人を描くもの、という。

それならば、この状況を前にして自分は何を描けばよいのだろう。

今度は自分が、迷路という名のポケットに吸い込まれてしまったかのようなようだった。

軍人の戸惑いの声が聞こえる。

頭の中が、まっし・・・、もとい、何も考えられなくなっていた。

ただ通り過ぎるだけの人々の足音を聞きながら、作家志望者はもう一度、ふえええとつぶやいた。



投稿時刻 : 2013.12.14 23:23

総文字数 : 1121 字

獲得☆ 3.778

## 幻雪 茶屋

「あ、雪」

彼女がそう言ったのは丁度空を見上げた時だった。

曇り空が広がっている。

太陽は出ておらず、光は雲に遮られている。

そして、雪は見えない。

僕は黙ったまま、歩を進めていく。

「ねえ、雪が降ってきたよ」

慌てて彼女が追いかけてくる。少し、怒っているかもしれない。

「雪なんてどうでもいいよ。面倒なだけだし」

僕は雪が好きじゃなかった。あんなもの邪魔なだけだし、雪掻きは面倒だし。

「そんなことはないよ。ロマンチックじゃん」

「最初はね」

冷たく言い過ぎたかもしれないと思って振り返ると、彼女は笑っている。

「ごめんって言おうとしたでしょ」

バレバレだ。見透かされている。

朝起きる。

寝ぼけ眼をこすりながら、冷蔵庫から牛乳を取り出してリビングに行くと、彼女はもう起きていて窓の外を眺めていた。

「おはよう」

そう声をかけると、彼女は振り向かないままに答える。

「雪、だいぶ積もったね。もう、別世界だよ」

「最悪」

僕は窓の外も見ないで、うんざりしたように言う。

「まったくー。風流の欠片もないでござるなあ」

おどけていった彼女がやっと振り返って笑う。

僕も笑う。

とても素敵な笑顔だ。

彼女は雪が好きで、とても好きで、雪が降った日はとてもごきげんだ。

それと対照的に僕の気持ちは沈むのだけれど、彼女の笑顔が救いになる。

僕は雪が嫌いだ。

大嫌いだ。

同じ速度で歩いているつもりでも、彼女は遅れてしまう。

「すごいね。雪道なのにそんなにスタスタ歩いて」

僕は彼女が追い付いてくるのを待ちながら、答える。

「ああ、これでも雪国出身だからね」

「うん。それは心強いね」

そう言って彼女は僕の手を握ってくる。

彼女の手は、とても冷たかった。

手をつないで歩き始める。

今度は彼女を置いていかないように。

「寒い」

「え？」

思わず、聞き返してしまった。

「えって、寒くないの？こんな吹雪なのに」

彼女はつらそうに目を凝らしながら僕を見つめてくる。

「あ、ああ、まあ、慣れてるから」

「すごいなあ。こんな吹雪、私には耐えられないよ」

気をつけないと。

彼女が歩く速度がますます遅くなる。

だから僕もゆっくりあるかないと。

彼女を置いてはいけない。

一人にしてはいけない。

「雪だ。雪だよ。ホワイトクリスマスだよ」

イルミネーションに彩られた街で彼女はそうってはしゃぐ。

過ぎ去っていく通行人は空を見上げ、その後怪訝そうに彼女を顔を見る。

「ああ、ホワイトクリスマスだ」

「綺麗だねえ」

「うん。綺麗だね」

「どうしたの？珍しいじゃん」

「まあ、クリスマスプレゼントってとこかな」

「なにそれー。キザー。きもー」

彼女は笑う。

僕も笑う。

僕らは空を見上げる。

彼女は見る、雪を。

彼女にしか見えない雪を。

でも今日だけは僕も雪を見る。

それがいつか幻覚でなくなることを願って。



投稿時刻 : 2013.12.14 23:44

総文字数 : 3394 字

獲得☆ 3.750

## 林檎の彼女 再び

orksrzy

「もう～、リンカちゃんは僕にぞっこんなのである～」

私は口にだらしのない笑みを浮かべて、氷の世界から夜のネオン輝く世界へと移った。

「それはダーリンが素敵すぎるからあ～」

金髪巻き毛のスタイル抜群の女、リンカちゃんは私の腰に手を回している。その手つきはいやらしい以外の何物でもない。私は有頂天である。

「リンカちゃんの頼みだから、事故起こした妹さんの示談金も払ってあげるよ～」

それは嘘である。私はとある人物から逃亡中のみであり、金など無い。だが、リンカちゃんの前ではいい格好がしたいのだ。それに私はこの後、リンカちゃんとラブホテルに行きたいのである。その料金を払う事さえ、私にはつらいものがあるが、ここが正念場であるので、私は涙を飲んで男の誓いと男根的な物を立てるのである。

「さすが、ダーリンはマジ素敵～」

リンカちゃんの甘い香水の匂いが私の鼻腔をくすぐる。いい日である。こんな日が私に訪れようとは、もはや心に浮かべることもできなかった。

私はとろんとした目つきで薄暗い道の先を見つめた。

と、そこに誰かが両足を地面に根付かせたように、微動だにせず、立っている。

暗がりにいるその人物が、低い声音で言葉を放った。

「上出来だよ、リンカ」

私は雪のちらちらと舞う夜の繁華街を彷徨っていた。

人々は浮かれた様子で顔を赤く染めて、時に笑い声を上げながら、歩いている。

この地方では一番の盛り場で、私はコートの襟を立てて顔を隠し、人ごみを縫って進む。

私はとある理由から、日本全国を逃げ回っていた。大学に通う私は、大学生らしい恋愛をしていた。彼女とは雑誌に載っているデートスポットなどを巡ったり、おしゃれな喫茶店でお茶をしたり、夜空を眺めて将来の夢を語ったりしたものだ。けれど、ひとつだけ、おかしいことがあった。それは彼女がいつも右手に林檎を持っていた事だ。彼女は林檎が大好きであり、私より林檎のほうが大事だと言ってはばからなかった。私はショックであった。どうして、私が赤い果物一つより下なのだと苦悩した。

そんな折、私は林檎病という伝染病にかかった。正式名は伝染性紅斑という。

私は喜び勇んで、彼女に連絡すると彼女はすぐに、当時私の住んでいたアパートへやって来てくれた。しかし、そこで事件が起こった。彼女が私を殺そうとしたのだ。彼女が言うに、林檎と私がハイブリッドしたものを食べたいというのだ。



もちろん、私には理解不能である。林檎と私は別個の存在として見て欲しいし、私は林檎より上の存在として見て欲しい。しかし、彼女の中では、林檎病の私=食べたいという図式が成り立つらしく、私は放浪の旅に出る羽目になった。

そして、私は今この街を当てもなく彷徨っているわけである。

物思いにふける私に笑顔を向ける女がいることにその時、気づいた。

赤いサンタのコスプレをしている。非常に良い体つきをしており、乳がでかい。とても重要なところである。その女は乳がでかい。

「ねえ、ダーリン、ちょっとそこの店、寄ってかない？」

むむ、馴れ馴れしい、と私は不快に思おうとした、が、その女はその豊満なおっぱいを私の腕に押し付けてきた。むにむにと魅惑的な感触である。

であるから、私は女に爽やかな笑みを向けた。

「僕は旧帝国大学の一つに通っているんだ」

聞かれもしていない事を言った。私の自慢は学歴しかない。他に自慢できる要素はない。

「すごーい。頭いいんだ。私、リンカって言うの。そこの店に入らない？」

そうやすやすと引っかかる馬鹿がいるものか。私は不機嫌な表情をしようとした、が、女はおっぱいを押し付けてくるのである。

「いらっしゃいませー」

気づくと私は店の椅子に座っていた。隣にはリンカちゃんがいる。不思議だ。一体、何が起こったのだ？

自問するが、答えは出ない。おっぱいに負けたなどという理由ではないはずなのだが……。

しかし、この店は寒い。店全体が異常ともいえる低温である。壁に温度計が表示されている。見ると、マイナス30度である！ 椅子も机も何もかもが氷でできている。

「ここって、アイスパブなんだよね〜」

リンカちゃんは慣れた様子で、氷でできた椅子に尻を付けている。私は冷たいのが嫌なので、氷の椅子に尻をつけそうとつけない。俗に言う空気椅子の状態である。根性をつけるために体育会系の部活でやられる奴である。私はこんな場所で何をやっているんだという虚しさに襲われたが、黙って耐えた。

「ダーリンってイケメンだし、私だったら、絶対彼氏にしてるな。あっ、ドンペリでいいよね」

リンカちゃんは私の返答を待たず、高級酒を注文する。

これはいかん。私はリンカちゃんに強く注意をしようと思った。リンカちゃんはその様子に気づいたのか、私を見る目が変わる。よし、いい展開である。このまま、言ってやれ、私。

その時、リンカちゃんは私の手を掴むと、そっとその豊満な乳に当てた。とても、柔らかかった。

「おお、いいよいいよ〜。お母さんの入院費ね、いいよ、払っちゃうよ〜」

気づくと、私はおおいに酔っぱらっていた。驚きである。一体、何が起こったのだ？ 自問するが、おっぱいに負けたわけではないと心の中の私が言う。

「ダーリン、ありがとう。じゃあ、ちょっと、外出してさ、いいことしようか？」

おおお、なんという事だ！ 向こうからお誘いである。これは怪しいと普通は思うかもしれないが、いや、いいのである。おっぱいおっぱいである。

私はリンカちゃんに適当に都合のいい話をしまくと、氷で覆われた店を後にする。

すると、夜道に立っていた人影がリンカちゃんに声をかける。

「上出来だよ、リンカ」

冬とはいえ、店の中と比べると生ぬるい空気が私を包んだ。

嫌な汗が浮かぶ。電灯の乏しい光がその人影の顔を照らす。

――林檎の彼女である！

右手に林檎を、左手に包丁を持っている。

私は慌てて、リンカちゃんに店に逃げるように伝えるが、リンカちゃんは私の脛を蹴りつけた。痛みで、はわわっと声を上げた私は地面に倒れ込む。

「これで金はもらえるんだね？」

先ほどまでの甘い声はどこへやら、リンカちゃんが低くかすれた声で林檎の彼女に問う。

「もちろんさ。林檎病になったこいつを食うだけだ」

彼女が一步、また一步と近づいてくる。私は地面をのた打ち回る。

「あと、この男、私にデレデレしちゃってさ、親の入院費とか妹の事故の示談費とかも払うって言ってたか

ら、それもよろしくね」

リンカちゃんがそう言って、私を蹴りつけた。おほうっと私の喉から声が漏れる。どこか嬉しげな響きが含まれていたことを、私は認めない。

「はあ？」

ここで彼女が恫喝するような調子で息を吐いた。暗がりでは分からないが、眉間にはしわが寄っているだろう。彼女は怒ると怖いのだ。しかも、今は凶器を持っている。危ないぞ、リンカちゃん、と渦中にいる私はどこか他人事なのであった。

「なによ？ 私のおかげでこのダサイ男、見つけれられたんでしょ？ だいたい、こんなレベルの低い男に逃げられるなんて、あんた、よっぽどだよ？」

リンカちゃんがトゲのある口調で言い放った。なるほど、女王様タイプだったか、と痛みが引いた私は真面目顔で呟く。

「この男を馬鹿にするのはいい。けれど、私を馬鹿にするのは許さないよ！」

ええ、それはそれでツライよ、と私は涙をそっと流したが、誰もそんなこと気付かない。

「バカ！ なに、林檎持ってんだよ」

リンカちゃんがスカートからカミソリの刃を取り出した。

「へえ、死にたいんだね、あんた」

彼女がどこか楽しげな声音で挑発する。

争いの前触れ。それは私が逃げるチャンスである。

私は立ち上がると、一目散に彼女のいない方向の道をひた走る。

「やば、私の男が逃げる！」

彼女の叫び声が聞こえる。それは料理を食べそびれた幼児の声に似ていた。

「だめだめ。逃がさないって。バカをこれで切り裂いてやるよ。私は学園じゃスケバンで通ってたんだ」

スケバンって昭和過ぎるだろ、今は2013年だぞ、という私の心中の叫びはともかく、二人で争いあってくれるのなら、それでいい。

私は雪の降る街をまた逃亡するのである。林檎の彼女からの魔の手に捕まらまいと、必死に今日も逃げるのである。

「ちなみに、林檎病はもうとっくに治ってるよ～！」

私は叫ぶが、彼女が吐き捨てるように笑い、吐き捨てる。

「食べるしか道は残ってないんだよ！」

私は彼女の固い決意にぶるぶる震え、夜の街へ消えていった。

了

※作品集への掲載にあたって、誤字等を一部修正しました。

※「第11回てきすとぽい杯」に、関連作品が投稿されています。

『林檎と彼女』



投稿時刻 : 2013.12.14 23:25

総文字数 : 987 字

獲得☆ 3.700

《男と女は解り合えない賞》

## 戻らない。

連結作品[豆腐を買いに。](#)はこちら

秋吉君

豆腐屋の朝は早い。

三郎は、父親の手伝いを終えると簡単な朝食をすませ、八時まで仮眠をとる。

目覚まし時計を止めると今が何曜日なのか、分からなくなることもある。

教科書をかばんに詰めて「いってきます」と声を張り上げ店から飛び出す。

創業百五十年。金沢で一番古い豆腐屋のせがれとして生まれて、今年中学を卒業する。

雪が散らつく大通りを三郎は走る。

同級生のほとんどは高校へ進学するため、受験勉強に忙しい時期だ。自分はといえば、中学を卒業した後、代々続く豆腐屋の仕事を手伝って、親父が引退した時には自分が跡を継ぐ。先に見える人生、と言われればそれまでだ。地元から離れることもない。

「あ、おはよう」

声がして、三郎は足を止める。

「おう」ぶっきらぼうに応えながら、そっと振り返る。

早朝、雪国の陽は淡く、無垢で透明な光が街にあふれている。

光の中に、クラスメートの京子が立っていた。

「宿題、やった？」

「え。なんだっけ」

マフラーの毛糸の隙間から、ふわっと息の煙がたつ。

「やっぱり忘れたんだ」京子は笑う。「一限目。数学の宿題、出とったよ」

「はあ、そうか」

二人は並んで歩いている。三郎はわざと京子の制服姿が視野に入らないよう、車道ばかりに目をやっている。

「なあ、さぶちゃん、ほんとに高校いかんの」

京子は背が低い。肉付きの良い体型だが、腰はぎゅっと締り、胸は豊かだ。美人とは言えないが、クラスの男子から密かに人気を集めていたのは、専らその肉体による所が大きい。

三郎はすぐ隣を歩く肉体を意識した。のどの奥に何かが詰まった感触を覚える。

沈黙があった。三郎はひととき険しい顔つきをしてみせた。

「やわらかくてな、あつつい塊なんだ」

「え。何？」

「豆腐だよ。出来立ての豆腐、やわらかくて乳色の、塊」

「さぶちゃんちの豆腐、おいしいもんね」

「むっと湯気がたって、ぽっかり浮かびあがるんだ。産まれたばかりの豆腐って。

そいつをすくって冷やして。毎朝つらいんだけどな、その時だけは、なんだか嬉しくってなあ。乳色の塊をなあ、こうやって掬い上げるときって、俺も知らんけど、なんか、赤ん坊でも掬い上げるみたいで。あほくさいだろ。でも、俺、嫌いじゃないんだ」

雪が舞っていた。沈黙。三郎は肉体を隣に感じるのが、堪えられなかった。

「さぶちゃん、私さ……」

京子の声は、ずっと後ろから聞こえた。校門へと続く道は淡い光があふれ、三郎には眩しすぎた。



投稿時刻 : 2013.12.14 23:45

総文字数 : 921 字

獲得☆ 3.727

《男と女は解り合えない賞》

連結作品戻らない。はこちら

豆腐を買いに。

秋吉君

私は走っていた。おつかい。金沢市内にある老舗の豆腐屋に向かって全力疾走。いい加減にしてほしいよね。高校受験を控えた一人娘に、豆腐買ってこいだ？ 年季の入ったママチャリをこぐこぐこぐ。太ももいて一っす。運動不足っす。街は雪が散らついていて、ほんとに寒い。いい加減、こんな田舎からオサラバしたいのにかんせん私ってばまだ中学生。向かってる豆腐屋ってばさ、同級生の三郎の店なんだわこれ。だっさ。豆腐屋のせがれで、中学出たら跡継ぐんだとさ。まあ一応幼馴染のよしみってやつで、道で会えば挨拶くらいはすっけども。正直だっさ。いまだき中卒ってありえなくね？ そんで悪いけど綽名のとおり、ジャガイモ君なんだわ。豆腐なのにジャガイモって何それ笑えねえ。こいつがむっつり野郎で。私の乳ちら見してんのモロバレだっつの。そんで勝手に顔赤らめちゃって。「豆腐掬い上げるときってなんか俺嬉しくってなあ」だって。だっさ。おめー乳見てたじゃん。何が豆腐の乳色だっつーのってどわーっ！ 糞ガキがいきなり飛び出してくんなっつーの！ ママチャリのブレーキ錆びてるっつーの！ ってかいてえええええええ！ 膝の皮べろりんちょだわ！ っておっさんクセえ私！ あいたたた結構血が出てるよコレ。乙女のおみ足が台無し。ガキはびっくりして泣き出して。泣きたいのはこっちだっつの死ねファッキュ！ あー信号待ちのばあちゃんまで心配顔で寄ってきて、いやあんた何の役にも立たねえから来なくていいし、「あら京子ちゃん？」じゃねーよ、よく見りゃ隣のくそババアかよ、いや大丈夫じゃねーし見りゃ分かんだろガキうるせえよてめえが泣くと私が悪者みてえだろうが！ 「あらあら、足から血が出てるわよ」って言われなくても十分承知。ごめんなさいね、ちょっと急ぎますからええ大丈夫、って立ち上がって痛痛痛、よろよろ歩いてようやく到着さぶちゃんの豆腐屋ね、

くそったれがきょーび豆腐なんてどこで買っても同じなんだよあほくせえ、  
こんなおつかいに出されなきゃこんな目にも遭わなかったっつーのに私ってば  
店に入ってにっこり笑って「炎の豆腐くださあい」ってかわいい声だしちゃって。  
この時間、必ず店にいるのな、三郎。じっとりした目で私の乳見るのやめてね。



投稿時刻 : 2013.12.14 23:44

総文字数 : 1168 字

獲得☆ 3.700

## 鐘の音の行方

げん@姐さん

遠い昔、わたしは、わたしの家族は、とても貧しかった。

そのためか、教育も足りず、善悪の区別も曖昧で生きるためにパンを盗む以上のことをしても、ちっとも心は痛まなかった。

教会のシスターたちは、食べ物をくれたけれど必ず説教がついてくる。

神が全て見ていますよ。懺悔なさい。

こんなことを続けていてはだめですよ…天罰が下ります。

神が見ている？

見ているだけの神ならなくていい。

こんなことを続けなければ、わたしは生きて行けない。

そんなわたしにとって、いずれ下される罰など恐るに足りない。

成長するにつれ教会から足は遠のき、かわりに足が向いたのはマフィアのアジトだった。

下心があるにせよ、彼らはシスター以上に食べ物も衣服も与えてくれたし、説教もしなかった。

けれどやっぱり彼らには下心があって、いつしかわたしには衣服のように武器が与えられるようになった。

ゴミのように扱われていたわたしを、彼らは筋がいい、飲み込みが早い、と褒めちぎった。

すっかりおだてられ、ナイフの扱いに長けた暗殺者になる頃、最早仕事をしなければ食べ物を与えられなくなっていた。

成長期に栄養の足りなかったわたしは、身長伸びもいまひとつでいつまでたっても子どものような見た目だった。

その見た目も手伝って、仕事は割とうまくいった。

ある日の仕事が、結果的にわたしの最後の仕事になった。  
端的に言えばやり直しにあい、暗殺に失敗し、そのまま相手に身柄を拘束されたのだ。

これだけ聞けば、わたしは殺されると誰もが思うだろう。

わたしだってそう思った。

だが驚くことに相手はわたしに教育を施し、衣食住を与え、ありふれた感情を呼び起こさせ、あまつさえ恋愛までさせた。

幸せだと、思っていた。

けれど、神は見ている。

シスターの音が蘇る。

いつか、天罰が…

走馬灯のように様々な記憶が再生される。

その大部分は仕事の記憶。

それは人殺しだったけれど、あくまで仕事だった。

たまに派手に反撃されて返り血を浴びたこともあったが、それはいつでもわたしの心を冷やしていった。

だからずっと、血は冷たいんだと思っていた。

なのに、いま、彼の傷口から止めどなく溢れる血は炎のようで。

その血に触れたところぜんぶ、あつくて息が苦しい。

報復には、報復を。

天罰が下るなら、わたしのはずなのに

自分の中の血が煮えたぎる。

ずっと手放せなかったナイフを知らず握り締めた。

けれど、長いこと鞘から抜かずにいたナイフが、使える状態である訳がない。

こんなに錆びた刀じゃなにも切れない。

わたしは、どうすべきなのか。

昔の自分を取り戻すべく身体を鍛え直し、ナイフを砥ぎ、報復すべきか。

彼の与えてくれた刀の錆びる幸せだった人生を握りしめ悲しみに打ち震えるか。

決めるなら、今。

彼の亡骸がまだわたしの胸の中で暖かいうちに。

彼に誓おう。



遠くの教会で鐘が鳴る。

わたしの心は、決まった。



投稿時刻 : 2013.12.14 23:39

総文字数 : 576 字

獲得☆ 3.667

## 錆びない刀の秘血

チャーチ

伍作の刀がよく斬れる、と評判になったのと同時期に、私の友人で刀鍛冶であるところの伍作がいやに憔悴し始めた。

「精魂込めて作りすぎじゃないか」

「いやあ、心血注がなきゃいい刀は作れんと気づいたのさ」

訪ねに行ったときにかけた言葉も聞かず目を爛々と輝かせてただ刀を鍛える伍作。

明らかにやつれており明らかにこのまま続ければ死ぬ。

私は少しおそろしく思えて休むよう彼に告げたが、

職人というのはそんなものである、刀を打ちながら死ねれば本望なのだ、

という言葉に引き下がるしかなかったのだった。

恐ろしいことに伍作の刀、どれだけ斬っても錆びぬとのこと。

「どうやって作っておるのだろう」

なにか特別な材料を使わねばこうはなるまいとは知り合いの目利きの話であった。

ともかく、伍作の刀はよく斬れる。そしてよく売れた。

彼の妻と子は安泰に暮らせることだろう。

本当に心血を注いだものには魂が宿り、力を持つのだ…伍作が妻に贈った言葉である。

そうして百本ほど鍛えたところで伍作は死んだ。

死して分かったことは彼の手首には深い傷跡が幾度も刻まれており、

さらには死体に血が一滴たりとも残っていなかったことくらいだ。

何故だか、伍作の刀を鍛えるための窯の炎はその後十年燃え続けた。

水をかけても消せなかった。

伍作の作業所からは鉄臭い匂いがずっとしていた。刀の鉄の匂いと言うよりは、血が燃えている匂いだっ  
た。



投稿時刻 : 2013.12.14 23:44

総文字数 : 2846 字

獲得☆ 3.625

《年末総出演賞》  
宇宙・この劇的なもの  
小伏史央（旧・丁史ウイナ）

大きな夢を持っていたんだ。腕がはちきれそうなほどに、大きな夢を。  
それでもぼくは、頑張っって持っていたんだよ。肩にちからを込めて、足をふんばって。  
夢を持っていたんだ。

ぼくの目の前にいるぼくは、とてもぼくに似ているけれど、その中身は、だいぶ違うようだ。目の前のぼくは、希少な純度の高いタンパク質で構成されている。そのひ弱な姿はどこか滑稽だ。表面的にはぼくとなんの変わりもないように見えるというのに、向こうの席でふんぞりかえっているブラックホールさんなんかは、明らかに目の前のぼくのことを嘲笑していた。希少種というものは、たとえばあのお姉さんのような美貌でももたない限り、サベツの対象にしかならないんだ。

「ぼくは夢は一度しか見たことがないんだよ。ぼくは、生まれて初めて見た夢が、最初で最後の夢だった」  
ぼくはまだ死んでいないのに、どうして、最初で最後だなんて言うんだい。  
「そんなこと、訊かなくても分かるだろ。ぼくのくせしてさ。この船に乗っているってことは、過去も未来もなんの違いもないってことじゃないか。この船は進みゆく特異点だ。そんなこと、この船に乗る前から知っていたはずだ」

ブラックホールさんの隣で、箱さんがぶつぶつと自分の中身について呟いている。彼は自分の中身にしか興味がないから、自分がもう公園のベンチにいないということに、気づいていないらしい。

いつからいなくなったんだろう。

ぼくにはわからないけど。

なに暗い顔してるの？ 乗組員のお姉さんが、ぼくたちのところにやってきた。お姉さんとは、同郷のよしみで、仲良くなったんだ。ぼくはお姉さんの雪のような顔に向かって、笑いかけてみせる。けれどぼくの目の前にいるぼくはというと、じっと鉄面のような顔をして、頬を持ち上げることさえしないという

のだから、どちらがアンドロイドなのか、わかんなくなっちゃう。

ぼくがなにも答ええないから、お姉さんはナイーブな箱さんのところへ行った。大丈夫。あなたは爆弾なんかじゃないのよ。きっとそうよ。きっと綺麗な畑のようなところが、あなたの中には広がっているの。そこでわたしは果物を育てて、たまにやってきた迷惑な動物を撃退したりして、たのしい日々を過ごしているんだわ。空想？ 空想でもいいじゃない。空想は爆弾では壊せないのよ。そう言って励ましていた。

それからしばらくすると、アナウンスが船内に響き渡った。

一時停船します。お姉さんの言葉とほぼ同時に、船が停まる。

「なにかあったのかな」

そうみたいだね。

キーッ。なにをするデスカ！ 座席ははちみつハニースウィートデスヨ！

肩をいからせたお姉さんが、大きなモグラのような生き物を二匹、両手でひきずって歩いている。

おいおいお嬢ちゃん。そんな顔してどうしたい。

どけくそじじい。こいつら宇宙に放り投げてやる。

嬢ちゃん、素が出ちまってるよ。

「なにか悪いことをしたみたいだ。お姉さんがあんなに怒るなんて、びっくりだな」

よっぽどひどいことをしたんだろうね。

で、モググたちがなにをしたっちゅーんや。犯罪か？ 悪の組織か？ そう問いかけてきたのはゴールデンフィッシュさんの幽霊だ。お姉さんは以前勤めていた船団で、金魚には嫌な思い出があるみたいで、幽霊には目もくれない。代わりにお姉さんはブラックホールさんに向かってむっとした顔をする。こいつら、船を食おうとしたんですよ！ わたしの大事な船を！

なにを言ってるデスカ！ 仰るデスカ！ 人生ベリーハードデス。胃もたれいやあ。

「船を食うだなんて、そんなことを考える生き物もいるんだなあ。まるで宇宙を滅ぼすみたいじゃないか」

ほら、またそんな下手な比喩を使う。宇宙を滅ぼす、なんて言っちゃったら、その虚構が出てきちゃうじゃないか。

「そんなの、知らないよ」

知らなくないわよ。お姉さんに叱咤される。もとの女性らしいお姉さんに戻っていた。虚構のなかで女の子がカワイコぶるのは、当然のことだから。

光が船のなかにまで差し込んできた。船のそとを見ると、生命体が、太陽の亡骸を抱きしめて泣いている。ほら、出てきた。ぼくの虚構だぞ。その生命体は、太陽を抱きしめるほどだから、とてつもなく大きな体躯をしているはずだけど、その姿はなんだか、ぼくよりもちっぽけで、ああ、宇宙の滅亡だなあ、と思った。

思ったと同時に、そとの景色はリセットされた。いつの間にかお姉さんから逃れていたモググたちが、ゴールデンフィッシュさんやはらぺこの金魚さんを捕まえようとしている。

宇宙がほんとに崩れちゃったんだ。そう気づくまで時間がかかった。宇宙は宇宙の姿をなくしていた。

ぼくは、お姉さんとおんなじ星で生まれた。お姉さんが生まれたときは、もう人類の歴史は終わっていたけれど、ぼくが生まれたときのこの星は、人類が支配する無法地帯だった。ぼくが生まれるより昔に、人間、という存在から、非人間、が生まれる。体のすべてを機械に代替したその、非人間、は、徐々に仲間を増やししながら、人間、を攻撃し始めた。ぼくが生まれたときというのは、だから、その攻撃というのがだいぶ済んだころのことだ。

人工的な多目的幹細胞から生まれたぼくの体は、初めて夢を見たときに、完成した。非人間、ではなくて、そのときはアンドロイドという言葉が、人間、に代わる新しい傲慢の代名詞だった。

そのときに、初夢を見たそのときに、ぼくは生まれたんだね。

「そうだよ。ポップコーンがぼくからこぼれてゆくあのとき、このぼくの他に、ポップコーンをこぼしていなかったぼくというものも、分岐して存在していたんだね」

そしてこの特異点で、

「ぼくとぼくは再開した」

船は、未来も、過去も、現在も。

そして現実と虚構さえもサベツせず、

この果しなき連動を進んでゆくよ。

宇宙が滅亡したあと、残った時空は時空ではなく、すべてがすべて特異点だった。宇宙のはじまりは小さな粒ではなく、宇宙よりも大きな夢だったのかもしれない。

すべての理論が通用しないところでは、すべてのわがままが通るんだよ。

ね、だったら、そろそろぼくとぼくは、「ぼく」になるべきだとは思わない？

「どうだろう。もうママもいないから、離乳したんだから、決めるのはぼくだよね。でも、船のなかにいれば、ぼくたちはぼくでなくてもぼくでいられるし、それならこのままでいいんじゃないのかな、って思うんだ」

でもね。ぼくは。

大きな夢を持っていたんだ。

大きな夢を。

船が加速する。

「それは、この船を出たら、叶えられる夢なのかな、ああ、叶えるとも、ぼくの夢なのだから、

ゴールデンフィッシュさんは、水槽のなかに。

モググたちは火星の投票所に。

箱さんは公園のベンチに。

ぼくは、ただひとりの「ぼく」は――、新しい物語へと。

お姉さんも、一緒に行く？ そう聞くと、まだナンパするには早いね、ぼうや。船に残るみたいで。

大きな夢を叶えに行こう。

物語は永遠に終わらない。

決してまた捨てられて、船につめこまれたりしないように――。

ぼくたちは物語を演じ続けるんだ。

新たなる宇宙が、いま、

うまれる。



投稿時刻 : 2013.12.14 23:45

総文字数 : 779 字

獲得☆ 3.600

## アルファブロガー

工藤伸一@ワサラー団

久々に更新したブログが炎上して、みるみる血の気が引いた。すっかり錆びきった心は脆くて、今にも崩れ落ちそうだ。かつてアルファブロガーと呼ばれていたせいもあって、長らく SNS ばかりしている間中ずっと「ブログも書いて下さい」というメッセージが沢山の読者から届いており、それに応えただけなのにどうしてこんなことに。

ピアニストは毎日ピアノを弾かないと下手になってしまうという。ブロガーだって長文を書き続けなければ下手になる。それで読まれなくなるだけなら何の問題もないが、自分で思っていた以上に影響力が強すぎたのだ。ブログ炎上の件は、ネットのニュースにまで書かれてしまった。記事を削除することも考えたが、乱立された「まとめサイト」を見たら既に「魚拓」がある。

「魚拓」とはウェブ上のコンテンツが削除される前に、その内容を完全にコピーして保存するサービスのこと。違法なものであれば削除依頼も出来るようだが、そこまでされているならデータとして所持している者は少なくないだろうし、いっそブログを放置する方が気楽だ。だいたいブログを辞めてしまったのは長文の執筆に飽きたからだ。もう何の未練もない。

そんな事情から今回の記事を最後に、本ブログは更新を停止する。今まで有難うございました、とまで書いたところで手が止まってしまった。炎上した記事の内容を考えてみれば、こんな宣言を簡単にしてしまっただけとは思えないからだ。何せ「渡る世間は嘘つきばかり」と題して、記事にしてほしいとの声が引く手あまたのアルファブロガーだった故に知ることができた、企業や有名人の裏事情を暴露して炎上したのだから。

とはいえ「渡る世間は嘘つきばかり」という思いは嘘ではない。ならば自分も嘘つきだとわかれば、その仮説は更に信憑性を増す。そのことに気づいて意気揚々と投稿ボタンを押した。さて次の記事は何にしようか。(了)





投稿時刻 : 2013.12.14 23:15

総文字数 : 1120 字

獲得☆ 3.500

## いつかみた光

松浦徹郎

「そっちの段ボール、とってくれ」

大学時代から、惰性で住み続けていた部屋を明け渡す日が来た。

「ちょっと、また古い本とか出てこないでしょうね？」

手伝いに来てくれているトモダチー彼女ではないし、妹のような身内的ななにか、とも違う。いわゆるトモダチだーがうんざりした表情でいう。

今までの部屋も十分に狭かったが、今度借りる部屋はさらに狭い。

僕は今朝から、「断捨離！ 断捨離！」と、うんざりするほど聞かされていた。

「たぶん出てこないよ。この箱は軽すぎる」

僕はハサミの片刃を使って、封をしていたテープを切る。

「なに？ なに？」

さっきから、二言目には捨てる捨てると、呪文のように唱えていたトモダチも、僕の肩越しに箱の中を覗き込む。

「なに、これ？」

「写真だよ」

「これが？」

箱の中に入っていたのは、スライドにしたリバーサルフィルムだった。

デジカメ全盛の今となっては、スライドなんてもちろん、フィルムですら「なんなの？」って言われそうだ。

「昔、カメラに凝ってたから……。これは、燃やさないゴミだな」

僕は、コンビニで買ったごみ袋に放り込もうとした。

「ちょっと待って！ ね、これ映画みたいにみられるんでしょ？」

「よく知ってるね」

「なんか、古い映画で見たことあるから。くらい部屋で、シーツをスクリーンにして。家族で写真をみるってやつ」

「これ、なに？」

遮光カーテンを引いて、壁紙をスクリーンにはじめた上映会。

数分と待たずに、トモダチは不満を口にした。

ま、そう言われるだろうなどは思っていたが、まったくトモダチの反応は予想通りだった。

「見ての通り、ティッシュペーパーだよ」

壁に映し出されるのは、まっすぐな光を浴びて陰影を作るティッシュペーパー」

「ゲイジツってやつ？」

トモダチは苦笑いだ。

「光を表現したかったんだ」

「どうせ光云々いうなら、雪景色でも撮ればよかったのに」

「無理無理。僕、インドア派だから」

僕は黙々とスライドを送る。

「これ、いつまで続けるの？」

これまた数分と待たずに、トモダチは音を上げた。

「いやなら、いつでもやめるよ」

「うーん。それもなんだか負けた気がする……」

「じゃあ、最後までみようか？」

「それはそれで、時間がもったいない」

僕は次のスライドをセットした。

「あー。もうわかったわよ！ わたしの負けでいいから」

「そう？」

「早く、荷物の片付けやっちゃおうよ」

「オッケー」

僕は何食わぬ顔で、スライドの束を不燃ゴミの袋に放り込んだ。

トモダチは知らない。

僕のティッシュペーパーコレクションには、巨乳モデル撮影会に参加した時のスライドも混じっていたことを。

トモダチは知らない。

僕がどれほど長く、トモダチからはじめてチョコをもらった日の雪景色を引きずっていたかを。

//おしまい



投稿時刻 : 2013.12.14 23:32

最終更新 : 2013.12.14 23:46

総文字数 : 2109 字

獲得☆ 3.444

## スノウ、スノウ、スノウ

碓氷穰（元うわああ（r y））

ある男が雪山を滑降していた。スキー板のワックスは塗りたてで、とても滑りやすく、男は満足がいていた。コーナーでエッジを効かせ、鋭角に雪山を切り刻んでいく。

男の平行ターンはとてもしなやかにこなされていて、男がターンを決めるたびに巻き上がる雪の粉が太陽の光を浴びて、まぶしいほどに輝いていた。

徐々にスピードを上げる。段差の急な地点を滑るときにはスキー板が雪面から浮き上がり体が浮くほどであった。

ゴーグルとマスクをつけている男の顔は見えない。無名の男が黙々と雪山を滑り降りていく。

晴れた日の雪山は稜線がくっきりと浮かび上がっていて、真っ青な空との境界のコントラストを強くしていた。

そんな風景の中、男は雪山を下って行く。男は重心を前に傾け、さらにスピードを上げた。そしてまたさらに・・・。

誰かがその瞬間を見ていたとしたら、あっ、と声を出したかもしれない。それは一瞬の事であった。一瞬、男が気を緩めた瞬間に、すべてのバランスが崩れた。

男は雪の積もった斜面に頭から突っ込み、転がり落ちていく。何回も、何回も回転しながら。速度はどのくらい出ていたのだろうか、体を強く打ち付けたかもしれない。男が転ぶ瞬間は体が宙に浮いていた。

腕や足がおかしな方向に投げ出され、男の手から離れたストックが斜面に触れて、まるでねじまがったシャフトのように四方八方へと飛び跳ねていた。

幾回転かしたところで、ついにスキー板が脱落し、まだ転がり落ちていく男の体から離れ、置き去りにされていく。

数十メートルくらいだろうか。正確な距離は分からない。しかしそれだけの距離を男は転がり落ちて行った。それだけの距離を転がり落ちて行ったところで、男の体はようやく静止した。

やはり衝撃が激しかったのだろうか。男の体はピクリとも動かない。スキー板は男の遥か遠く。ストックの紐が投げ出された男の両手に何とか引っかかっている。

険しい雪山。とがった峰。真っ青な青空。粉雪が舞い上がり、ダイヤモンドダストのようになっている。その中に、ぽつんと小さな黒い点。力を失った男の体。

そんな悲しげな静止画。あたりには誰も人がいない。誰も助けに来ない。何物も動かない。

空中に動く雲がなければ時間が止まったと錯覚したかもしれない。一瞬の衝撃のあと、静寂があたりを包んだ。

ここからは風の音も聞こえない。

#

赤子に乳をあげている母親の姿がある。先ほどまで赤子は泣いていて、さすがに大人でもうるさいと思ってしまうほどであった。

母親はそっと服を脱ぎ、乳房を露出させる。そっと赤子を抱きかかえ、赤子の口元へと乳房の先を近づける。

赤子は小さな口を開き、母親の乳首を口に含む。そうすると、先ほどまで、うるさかった赤子の鳴き声が途端に止む。

母親はゆっくりと体を左右に揺らし、赤子を安心させる。赤子は嬉しそうに母乳を飲んでいる。

数分間その光景が続いた。

暖炉からぱちぱちと薪の燃える音がした。外は晴れた冬の日であった。

窓からまだ解けていない雪が少しだけ見える。

#

「雪」と「光」は姉妹だった。それも双子の姉妹であった。

まず最初に「雪」が生まれ、その数時間後に「光」が生まれた。二人は両親に大事に育てられた。赤ん坊のころからいつも二人は一緒だった。同じ母親から乳をもらい、二人で同じご飯を食べ、二人とも同じデザインを着た。

年を重ねるにつれ、二人はさらに似ていくようになった。黒くまっすぐな髪。黒い瞳。透き通った肌。

二人とも体が細く、どこか薄幸そうなところもそっくりであった。

ある日母親が言った。

「二人ともそっくりね。お母さんも見分けがつかなくなっちゃいそう」

その日は二人とも黙っていた。

そしてまたある日、「光」が言った。

「こんなに似ているのは嫌だ」

「雪」は言った。

「でも仕方がないよ。双子なんだから」

「光」は言った。

「なんで双子なの？」

「雪」は言った。

「そんなこと・・・分からないよ」

なんだか「光」も「雪」も泣きそうになった。

「光」はなんだか耐えられなくなって家から飛び出して行った。突然のことだったので「雪」は後を追うことができなかった。寒い冬の日の事だった。

その日の晩、「雪」が一人で晩御飯を食べていると、母親が警察と電話をしていた。母親は少し取り乱した様子で、それでも冷静を保とうとして、「はい・・・はい・・・」と頷きながら、受話器に話しかけていた。

「雪」もなんだかよく分からなくて、晩御飯もあまり喉を通らず、ただじっとしていることしかできな

かった。

それからまた月日が流れた。

二人はすっかり大人になった。妹の「光」は来月結婚するようだ。「雪」は母親から電話でそう伝えられた。

「雪」は受話器を置いた後、自分が暮らすマンションのベランダに出た。その日もまた冬の日で、冷たい風が「雪」の頬をなぞった。

眼下には車のヘッドライトやテールランプが流れていく。「雪」は少し近眼なのかもしれない。その光の輪郭が少しぼやけて見えた。

雪が降ってきた。こんな都会にも雪が降るんだな、なんて「雪」は思った。掌で雪のひとつを捕まえると、体温ですぐに溶けてしまった。

「雪」は少しだけ、あの日すぐに「光」を追いかけなかったことを後悔していた。



投稿時刻 : 2013.12.14 23:07

総文字数 : 441 字

獲得☆ 3.250

## 我は報す

司令@一字でも前へ

喉の奥で炎が焼ける。  
血は乾き、風を受ける目は罅割れる。  
脚が錆びついたように軋み、重い。  
それでも私は足を止めるわけにはいかない。  
道なき道をひた走り、  
木々を掻き分け、草花を踏み散らして、  
荒ぶる一陣の疾風となりて私は駆ける。

私が運ぶのは物ではない。  
それは希望であり、誇りであり、力強い言葉だ。  
伝えねばならぬ。届けねばならぬ。  
これまでに斃れた多くの仲間たちのためにも。

野を行き、山を越え、川を渡る。  
目まぐるしく変わる景色を追い抜いて、私は駆けた。  
やがて街が見えてくる。  
街の入り口には人々が集まっている。  
人々は私たちが見えるなり、大いにどよめいた。  
私は街に滑り込む。ぼろぼろになり、長らく静止を忘れていた足をようやく止めた。  
群集は不安そうな顔で私たちを眺めている。  
私は最後の力を振り絞り、大きくのけぞった。

「我らの勝ちだ！」

言葉は確かに届けられた。

歓声が上がる。私は膝を折る。

駆け寄る者はいない。

言葉を伝えた私の主人は、皆に胴上げをされている。

主人の笑顔を仰ぎ見ながら、私は静かに目を閉じた。



投稿時刻 : 2013.12.14 22:46

総文字数 : 448 字

獲得☆ 2.875

## 雪印乳業の思い出

ひやとい

北海道においてかって光り輝いていた存在であった雪印乳業。

2000年におきた大阪工場の不祥事などで会社組織自体はなくなったが、その名は今も雪印ブランドとして牛乳やバターにその名をとどめている。

子供の頃は雪印派か、北海道におけるもう一つの牛乳大手である、よつば乳業のよつば派かで対立が生まれていたものだった……というのはウソで、実際はみんな少しでも安ければこだわらずに買っていたのであった。ただしマーガリンは圧倒的に雪印であった。というかよつば乳業のマーガリンなんて、まああったんだろうけどあんまり見なかったなあ。

まあ、昔からよく言ってたもんね。『パンにはやっぱりネオソフト！』

本当は詳しいこととかぐぐればいいんだけど、できたら当時の記憶だけで書きたいので（資料をあたるのがめんどいともいう）こういう感じになるのである。そうなのである。私が初代文体王なのである！

ところで、今ではまったくアイスクリームを食べない私が、かって好きだったものが、雪印のバニラブルーだったということだけは書き記しておきたい。





投稿時刻 : 2013.12.14 23:20

総文字数 : 1047 字

獲得☆ 3.900

※禁止ワード「白」使用

《無修正ホワイト露出賞》  
日焼け肌のメランコリー  
工藤伸一@ワサラー団

医者から聞いた話だが、直射日光に含まれる紫外線を浴びると健康に必要な栄養素が活性化され、心身ともに上部になるという。そのかわり浴びすぎると皮膚ガンになりやすいため、1日10分程度に留めておくのがちょうどよいそうだ。

なお窓ガラスは紫外線を通さないので、窓を閉めたまま部屋の中にいるだけでは効果がない。だからカーテンを閉めたまま引きこもるような人は、その環境を続けることによって更に心を蝕まれていく。外出することの少ない物書きなども同じだから、1日1回は窓を開けて日光浴をするといいだろう。

健康のためには歩くのも大事だから、1日10分だけ散歩をする手もある。古今東西の文豪が小説の構想を練る手段として散歩を活用していたのは、身体のみならず心理状態をも強くする原理からすれば理に適っている。

雨や曇りの日でも紫外線は届くから、とにかく太陽の出ているうちに逃げねばならない。月光は日光の反射によるものだから夜でも良さそうに思えるが、どうやら違うようだ。そこら辺は調べておく必要があるけれど、体調が芳しくないで今すぐには難しい。

健康のためにとあって晴れの日にはずっと屋外にいたものだから、全く逆効果で疲弊している。そんなバカなことがあるのかと医者に相談してしまいたら、上記のような理屈であることが分かり、これから外を歩く際には10分間だけ肌を晒し、それ以外は帽子やマスクや手袋をつけようと考えている。

それ以前の問題として医者から猛省を促されたのは、屋外での肌の露出方法だった。日焼けすれば心の鬱屈も晴れるだろうと思いついたものの、やり方が過激すぎた。日焼けといえばサーファーなど夏のイメー

ジが強いものの、スキーやスノーボードといったウィンタースポーツにも「雪焼け」という現象がある。

日光が地面の雪に反射して日焼けするのだ。ゴーグルに覆われた目元以外は真っ黒になる。しかし顔だけ焼けていても心許ないので、それならばいっそ全裸で雪の中を遊ぼうと考えたのだ。しかもそれは健康のためなので、白昼堂々と露出していても言い逃れできる。種を明かせば、もともとそれは単なる性癖なのである。

そういった次第で今後は、1日10分だけ昼間の屋外を全裸で闊歩する方向性に、なくなく切り替えねばならない。けれどもせっかく乳首まで黒焦げのワイルドなボディを得たというのに、それを見せびらかせるチャンスが減った悲しみをどうして埋めたものか。股間だけ隠す手もあるが、その部分こそが特に気に入っているのだから、如何ともしがたいのである。(了)



投稿時刻 : 2013.12.14 23:57

総文字数 : 673 字

獲得☆ 3.778

※制限時間後に投稿

《赤は白の中に、白は赤の中に賞》

## 錆色の女

連結作品[染めた男](#)はこちら

永坂暖日

喉を切り裂かれた標的の手が空しく宙を掴み、前のめりに倒れていく。地面に倒れたその首元に手を当てて脈がないの確かめた。死んでいる。

指先についた血を髪に擦り付けた。髪の色をさらに深い色にするために。いつから始めたのか分からない、それは彼女の癖だった。

夜更けの通りに今は誰の姿もないが、巡回の兵士がいつやって来るか知れない。それに、吐く息が白くなる夜だ。さっさと家に帰って、温かい寝台に潜り込みたかった。

○

「おかえり」

家に帰ると、蝋燭の小さな炎と、男の声が出迎えた。

「ただいま」

こんな夜中になっても男が起きて待っていたのが嬉しくて、飛びつくように広い背中を抱きしめた。慣れ親しんだ暖かさが心地よい。

「うまくいったか？」

「当たり前でしょ。誰が、あたしを育てたと思っているの？」

彼女の顔をのぞき込む髭面に唇を尖らせる。男は忍び笑いすると、よくやったと言って、彼女の小さな唇に自分のそれを押し当てた。

「――また一段と染まったな」

おもむろに唇を離し、男が錆色の髪を一房すくう。

男と出会った時、この髪は銀色に輝いていた。けど他人に血を流させているうちに染まり、錆色になっ

ていった。白銀の髪の方が良かっただろうと男は時々惜しむように言うが、彼女はこの色が好きだった。

男に教え込まれた技で誰かの皮膚を裂き、流れた血でこの色になったのならそれで構わない。彼女の何もかもを、男によって染め変えられるのは、身も心も彼のものになれたようで本望ですらある。

「もっと深い色にしてよ」

今度は彼女の方から、ねだるように唇を合わせる。

朝までは遠く、口付けだけではまだ寒かった。



投稿時刻 : 2013.12.15 00:11

総文字数 : 682 字

獲得☆ 3.778

※制限時間後に投稿

《赤は白の中に、白は赤の中に賞》

連結作品 [錆色の女はこちら](#)

**染めた男**

永坂暖日

寒さで小さな頬は林檎のように赤くなっていて、新雪のような色をした髪との対比がより印象的だった。親もなく家もなく行くあてもない少女を拾ったのは、腐ったごみが散らばりすえた臭いの充滿する路地裏で、そこにまったく似つかわしくないすがすがしい光の射し込む朝だったのを、昨日のこのように覚えている。

拾ったのはほんの気まぐれである。この少女に、男の持てる技のすべてを教え込んでみようと、戯れに思い付いたのだ。雪のような髪が、血で濡れたらどうなるのだろうという残虐な想像を試してみたのだ。

暗殺者というろくでもない男に拾われたのに、少女は恩義を感じたのか、男の教えを身に付けようと必死に努力した。気まぐれに拾ったがどうやら才能がありそうで、男も甘くはしなかった。

見つけた時には乳臭いガキだったのに、気が付けば唇に紅をさすような年頃になっていて、その時にはいっばしの暗殺者だった。

腕に関しては申し分なく、女であることを最大限に利用するしたたかさも教えていないのに身に付けていた。惜しむらくは、雪のようだった髪色が、血で染まったように赤くなったことだ。

「光にあたればきれいな赤に見えるな」

男は片肘をついて、隣で寝そべる娘の髪をすいた。ちょうど彼女の頭に朝日が射している。

「わたしは何色でも構わないよ。あなたがいいと言ってくれるなら」

けなげなことを言う娘がいじらしくて愛おしい。無垢だった娘を自分が染めたと思えばなおさらだ。

「朝だろうが夜だろうが血に染まっていようが——いい色だ」

剥き出しの娘の肩に、唇を落とす。

朝日が燦々と降り注いでいるが、寝台から抜け出すのはまだ先になりそうだった。



投稿時刻 : 2013.12.15 00:10

総文字数 : 752 字

獲得☆ 3.600

※制限時間後に投稿、お題「炎」不足

## 痲

太友 豪

僕の知人が、長い長い撤退線が続けてきた人間にだけ共通する匂いがあるといっていた。  
なるほど、匂いというのは言い得て妙な表現で、耳には聞こえず、目には見えず、けれども一度知覚してしまえば無視することは難しい。

そういう匂いは消すことの出来ない烙印のように人間の奥深くへとしみこんでしまうものらしい。

練炭はオレンジに輝き、僕たちの身体を温めてくれる。

それこそ信じがたいことだけれども、事実として日本の世の中は信頼によって成り立っている。たとえば、明日もスマートフォンでインターネットにアクセスできることを疑う人間はいない。たとえば、契約書を取り交わせば、その内容が果たされると信じている。それは信頼があるからこそだ。

今回の計画についても、ままごとのような（実際にそうなのだろう）契約書を取り交わした。

ぼくは、血が恐ろしい。凶鑑か何かで見た血漿が、尿とそっくりでそんなものが自分の身体の中に流れているとおもうと、肌が粟立つおもいだ。

ふと、鼻の奥に錆のような匂いが広がった。鼻木でも出たのかと手を当ててみても何の感触もない。

先ほどからの息苦しさは、ワンボックスカーに七人も乗り込んでいるためだろう。

車の外では白い雪が舞っているようだ。残念なことに、車はヘッドライトさえ消しているので、実際には空から雨以外の何かが降ってきている、くらいの感覚しかない。

誰かが持ち込んだ睡眠薬のPTP包装シートとウイスキーが回ってくる。

ぼくは白い錠剤をPTP包装シートから押しだし、しげしげと観察する。見た目は市販の風邪薬や痛み止めとほとんど変わらない。

少し迷ってから錠剤を四粒。琥珀色のウイスキーでむせながら飲み込む。

いくら待っても、白く輝く光なんてやってこなかった。

アルコールと薬品の暮れる眠りのなか、僕の脳は一酸化炭素によって――



投稿時刻 : 2013.12.15 00:12

総文字数 : 427 字

獲得☆ 3.000

※制限時間後に投稿、お題「雪」「光」不足

## きみのために。あと余った分をわたしに少し分けて欲しい

太友 豪

今でも、夢に見ることがある。

あたたかな母の胸に抱かれてムムっている。その柔らかさ、あたたかさ、乳の香りに包まれて、わたしは安らかに眠っている。……そんなわたしを第三者的な見るわたしからは安らかな安心しきった表情で目塗っているわたしが見える。

わたしの子供たちにも似ているその赤子の顔立ち見て、わたしはそれが紛れもなくわたしであるという確信を抱く。

その夢が続いている間中、わたしの胸の中はあたたかなものでいっぱいになる。

いつの間にか、赤子を胸に抱いているその女性は、わたしの母ではなく妻へと変わっていた。妻にはすっかり頼り切っていて、わたしはまるで赤子のように彼女の甘えきっている。

この夢を見たことではなく、覚えていたことにこそ意味があるのかもしれない。

久方ぶりに、妻におはようのキスなどをしてみようと思うのであった。

ちゅーって。ちゅーって、ね。

もし、数日後にやけに落ち込んでいる様子のわたしを見かけたら、それはそういうことなので、どうか察してあげて欲しい。

## 関連作品のご紹介

---

お題の「炎・血・鏝」「雪・光・乳」を取り入れた Twitter 小説を書いてくださった方がいらしたので、Togetter にまとめページを作成いたしました。ぜひこちらの作品もあわせてお楽しみください。

第 12 回てきすとぼい杯のお題で **Twitter** 小説

<http://togetter.com/li/609582>

※他にも関連作品がございましたらリンク追加いたしますので、見かけた方はご連絡くださいませ。



## 終わりに

---

2013 年最後となります第 12 回てきすとぼい杯、お楽しみいただきましたでしょうか。

年末でもあり、今回は〈紅白小説合戦〉と題しまして、お題を 2 パターン 2 会場に分けての同時並行開催といたしました。

作品募集時点では、紅白どちらのお題で執筆するかを迷ってもらう、というつもりのお題・時間設定でしたが、いざ作品が集まってみますと、予想以上に紅白両組へのご参加者が多く、またその作品の多くが、紅白相互で内容的に連動する、シリーズ作品、連結作品とも呼ぶべき作品群であったこと、これまでの作品一本勝負とはまた一味違った、新鮮で奥深い競作の形が垣間見えたように感じております。

ただその副作用と申しますか、2 作品を投稿するには、1 時間 15 分という制限は少々短すぎたこと、また読者さまにとっても、関連する対抗組の作品が探しにくかったり、投票の際に、作品単独での評価とするか、連結作品を合わせての評価とすべきか迷うというご意見が多かったりと、運営面での課題も、多く明らかになったように思います。

また今回は初めて、お題に禁止ワード（紅組「赤・紅」白組「白・銀」）を設定いたしました。

残念ながら禁止ワードによる失格作品が出てしまいましたものの、色名を禁止されながらも、逆に色彩を感じさせる作品がやはり多く、禁止ワードそのものを作中に取り込むなど、予想もつかない創意が発揮された作品もあり、創作の出題形式として、様々な可能性の広がりを感じる結果となったように思います。

――最後になりますが、今回も非常に魅力的で仕掛けや工夫の凝らされた作品をお寄せくださった作者の皆さま、投票・感想・チャット会にご参加くださった皆さま、そして時間不足ながらも、連結作品など新しい可能性に挑戦してくださった皆さまに、この場を借りてお礼申し上げます。

てきすとぼい杯もついに 12 回目、ようやく 1 年の節目を迎えることができました。

2013 年、まだまだ未熟で不備も多いてきすとぼいとてきすとぼい杯にお付き合いくださいまして、まことにありがとうございました。

てきすとぼい杯は、今年も、毎月中旬頃に定期開催予定でおります。

2014 年も、てきすとぼいと てきすとぼい杯を、どうかよろしく願いいたします。

2014 年 1 月 18 日  
てきすとぼい杯 運営担当

※なお、次回てきすとぼい杯は、本日 2014 年 1 月 18 日（土）開催の予定です。



作品集電子書籍を  
Puboolにて頒布中。

# 言葉の茂る 樹が育つ。



概ね実話です

作者さんの作品解説  
聞きたいですね

蜜柑の匂いが  
してくるようですね

若干テーマの  
ぶれのようなものを  
感じました

恋愛系の作品が  
多かった印象

ほのかなえろすを  
感じました

ラノベタッチな  
感じで軽快で  
みやすい

この世界観で  
300枚くらい  
書いて下さい

競作・共作  
テキスト創作サイト

**できすとぽい**  
**text-poi.net**

前衛的ですね。  
私も結構こういうの  
好きです

読んでいて時々、  
すごく言葉が刺さったり、  
強く共感してしまったり

よくあるパターン  
なだけど  
「ベタだなあ」と  
感じさせない筆力

読んで  
ドキドキ  
しました……

このお題消化法は  
正直やられたーと  
思いました

このようにこそ、  
Kindleで出版したら  
いいのに

予想外の結末に、  
「ええっ!？」って  
声出ちゃいました

適度な緩急、  
リズム感があって  
とても良かった

なんか直すと他の  
ところのバランスまで  
崩れちゃうような

できすとぽいは、競作や共作を支援する  
テキスト創作サイトです。一人ひとりのウエブ  
作家たちが、競作・共作を通じて結びつき、  
感想やアドバイス、採点などをかわしながら、  
よりよい作品を創ることを目指しています。  
作家同士が言葉を交わしあい、言葉のやり  
とりが豊かに茂り広がっていく。そんなサイ  
トにあなたも参加して、一緒に創っていきま  
せんか？  
いまはまだ、小さく芽吹いたばかりですが、  
いつかきつと言葉の大樹になると信じて。

てきすとぽい杯作品集  
〈第12回〉

<http://p.booklog.jp/book/81705>

編集まとめ : てきすとぽい

<http://text-poi.net/>

てきすとぽいプロフィール

<http://p.booklog.jp/users/textpoi/profile>

表紙デザイン : 蟹川森子

てきすとぽい杯コピー : 茶屋休石

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/81705>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/81705>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー

<http://p.booklog.jp/>

運営会社 : 株式会社ブクログ



アキスとぼい杯